



# 21世紀の人類に対して今我々ができること

プラハにおける世界の著名人との対話をもとに

堀 武昭



## はじめに

過去五年間にわたり、チエコ共和国のプラハ城で開催されてきた「フォーラム二〇〇〇会議」の概況報告がヨルダン王国エル・ハッサン皇子の「緊急アピール」から始まることに、多くの読者は奇異な感じを抱くに違いない。当初、こうした構成で本書を書き始めようとは、私自身が夢想だにしていなかつたのである。しかし、五年間の成果を丹念に洗い出しているうちに気が変わつた。それは、新たな事実を発見したと言つたほうがよいかもしないが、この緊急アピールにフォーラム二〇〇〇のすべての目的、使命が集約されていることに気付いたのだ。

ハッサン皇子が緊急アピールを出すことになつた契機は、昨年九月十一日にアメリカで起きた同時多発テロ事件であつた。この事件が多くの無実の人を巻き添えにし、彼らの命を奪つたという意味で悲劇的、かつ衝撃的な事件であることは否定しようがない。しかし、それにも増して世界が恐れたのは、二十世紀を通じて人類が究極の目標としてきた「恒久平和の達成と世界秩序の維持」というメルクマールが崩壊、あるいは謙虚に見積もつても、その動きに逆風が吹き荒れることであつた。それはまた、人類の歴史に大転換を迫ることであり、善悪は別にして新たなパラダイムが登場することを意味していた。

不思議なことだが、一九九七年に開催された第一回会議以来、フォーラム二〇〇〇はまさに二十世紀を総括するような大きな事件といつも遭遇してきた。最初の年には、ダイアナ妃の悲劇的事故があつた。この事故は単なる王室の悲劇だけに留まらず、世界中の人々

が悲嘆にくれ、彼女の死を悼んだ。それをポピュリズムの世界的伝播、あるいは第四の権力を象徴するマスコミの影響力と両断することも可能だ。しかし、それは人類の価値観が世界的な普遍性をもつた象徴的事件と見ることもできる。フォーラム二〇〇〇の当時のメイン・テーマは、いみじくも「グローバリゼーション」であり、世界のあらゆるところで起こりつつある現象を徹底して検証することにエネルギーを傾注していたのは偶然ではない。

五年目は、開催直前に九月十一日のテロに見舞われている。新たなテロを警戒し、海外への出張は自粛される中、世界の指導者が集うメジャーな国際会議もことごとくキャンセルされた。会議には、ドライ・ラマやビル・クリントン前米大統領を始め、世界の多くの首脳が招待されていた。ハッサン皇子もそのうちの一人であつた。そうした中、チエコのヴァーツラフ・ハヴエル大統領やフォーラム二〇〇〇の関係者が熟慮した結果、会議は予定通り開催されることが決定された。これは、会議参加予定者さえ驚かす決定であり、多くの参加者は当然躊躇した。しかし、彼らは過去の実績と栄誉に恥じることがなかつた。大半の人々が「よく考えてみれば、こういう時期だからこそ、少々の危険を犯しても会議を開催する必要がある。世界が将来の道を踏み誤らないためにも…」と参加に踏み切つてくれたのだった。新たなテロの対象として最も危険度が高かつたのはクリントン前米大統領であつたが、彼もまた同じ判断であつた。一方、ハッサン皇子は、逆の意味で最も辛い立

場にあつた。アメリカや西欧諸国はいつせいに反イスラム感情を沸き立たせ、弁明のチャンスさえ与えようとしなかつた。「テロには必ず理由がある。その背景を理解し、根本的な問題を解決しなければテロは撲滅できない」と言うことを許す雰囲気すらなかつた。こうした状況下で、ハヴエル大統領とならびフォーラム二〇〇〇の中心的リーダーシップを担つてきたハツサン皇子が、緊急メッセージを自らの責任と決断で世界に訴えたのである。勇気、決断、実行力、抑制、冷静な判断力、事態を見通す洞察力と国際的センス。フォーラム二〇〇〇が世界の識者や指導者を招待し、継続して会議を開催してきたのは、まさにこのためであつた。

ここに至るまで、既に五年が経過している。長かつたとも短かつたとも言えるが、間違いないことは、「継続は力なり」ということだろう。「フォーラム二〇〇〇は当初の使命を達成した」という言葉を信じるなら、今後の新しいフォーラム二〇〇〇の理念には、「行動と実践」が新たに加わるだろう(巻末のThe Prague Declarationを参照して頂きたい)。さもなければ、「国家テロ」という逆風が世界を圧倒する恐ろしい時代になつてしまふ。

---

二〇〇一 年八月

堀  
武昭



## 目次

はじめ	3
緊急アピール	8
序言	14

# I 第一回会議 一九九七年九月三日～七日

17

時代の分岐点に差しかかった世界	18
-----------------	----

「道徳を再発見することが究極の願い」	18
--------------------	----

フォーラム二〇〇〇会議のスタート	18
------------------	----

厳重な警戒のもとで会議開催	33
---------------	----

プラハで開催した理由	36
------------	----

22  
29

## II

# 第二回会議 一九九八年十月十一日～十四日

43

## グローバリゼーション

### —実証、体系、構想・概念—

反省と新機軸の構築	44
-----------	----

学生代表を公式に招待	50
------------	----

評価はコインの表と裏	54
------------	----

真摯なコミットメントとフィードバック	56
--------------------	----

### III

## 第二回会議 一九九九年十月十日～十二日

将来の地球のあるべき姿  
—理想と帰結—

転機となる重要な会議 60  
学生の本格的参加 61

グローバリゼーションを脅かす危険な流れ 62  
スピーチの評価 65

### IV

## 第四回会議 二〇〇〇年十月十五日～十八日

倫理、宗教、教育を通じて  
のグローバリゼーション達  
成の道

より現実に即したテーマからアプローチ 68  
生き生きとした文化・芸術セッション 70  
ソインカの分析力 74

### V

## 第五回会議 二〇〇一年十月十四日～十七日

グローバリゼーション時代  
における基本的人権

ハヴエル大統領と笛川理事長の信念 78  
ハッサン皇子の功績 82

プラハ・ラウンド・テーブルの成果 84  
際どいジョークが雰囲気を和ませる 86  
同時多発テロから人権問題を問いただす 89

終わりに—フォーラム二〇〇〇新機構発足を前にして—

## 緊急アピール

ローマクラブ会長

ヨルダン王国

エル・ハッサン皇子

可及的速やかに取り組むべき次の課題は何か

——世界人類共通の柔軟な基本的人権の確立を——

後世、二十世紀は流血に彩られた戦争の世紀だったと記憶されるであろう。同時に、過去千年の歳月も、自分以外の民族を非人道的立場に駆り立て追いやった歴史として書き残されるであろう。二十一世紀も、周知のとおり凄惨な流血から始まつた。憎悪、怒り、暴力の声が巷に溢れ、今後の千年ですらそれらに強く引きずられそうである。人類は、他者を理解しなければどうにもならないという（最も基本的な）岐路に再び立たされている。世界の指導者にとつて、「文明と文化」という世界を世界ならしめている一対の概念を、もう一度原点から見直す時期が来たのではないか。

多くの人にとって、文化と自己の帰属意識を持つことが世界の安全を保障する要であることを、ここで再認識すべきではないか。地球化と呼ばれる現象がすべての人に正統に受け入れられるためには、前提として宗教、歴史、あるいは法制面などにわたる多種多様な伝統が認められるべきである。この共通認識が確立しさえすれば、グローバリゼーションは、アメリカあるいは西欧の基準を他の世界に押し付けるという見方は成立し得なくなる。そして、テロリズムそのものが存在理由を失い、敗北するはずである。

今、我々が緊急にしなければならないことは、誰もが受け入れることのできる人類共通の倫理観に基づいた連帯を発展させることである。この倫理は狭義の意味ではない。歴史の試練を耐え、人類が共通して持つていている社会文化的な価値観である。この連帯感こそ、変化をもたらす力の源泉である。若い世代、社会から無視され放棄されてきた人々はもち



日本財団の笹川陽平理事長とエル・ハッサン皇子

ろん、人為的要因だけでなく自然の脅威によつて生活を脅かされたすべての人をも包含しなければならない。世界至るところに銃が溢れている。それなのに、バターはいつたいどこにあるというのだろうか。

連帯の中から、テロリズムに対処する方策を探し出さねばならない。この認識に立つたとき、人がなぜ同胞を苦しめるようなことをするのか、我々は根本的な理由を初めて理解できるであろう。連帯という倫理観こそ、世界人権憲章がを目指す究極の目標であることも自明である。あらゆる衝突を想定してみると、人と人とのもたらす対立、人と自然、人が作り出す災害の中にすべての災害は包括されている。そして、実に悲しいことであるが、世界はますます問題を大きくし、解決はますます遠くなっている。

今こそ、政治と政策の定義を明白にする必要がある。大多数の国が必要としているのは、理念であり長期政策である。多くの国が武力による対立や病気、貧困にあえいでいる。こうした事態に思いを致さずして、どうして倫理的変化をもたらすことができるといえよう。当然と受け入れられてきた概念すら、もう一度見直す必要がある。例えば、ドルを基軸にすべてを判断しがちなところから貧困は生じる。こうした点を、人間の安寧、福祉という質の面から再検討すべきではないだろうか。経済、政治をもつと人間的なものにするために、人間の幸福を国や国際社会の政策決定の中心に置かなければならない。

我々が直面しているテロリズムあるいはその遠因に対応するには、持続性が重要である。

次の時代を担う世代とともに、ビジョンを打ち出すべきだと思う。

戦争のたびに、人類共通の人権がどうして思い起こされねばならないのか。平和を守り抜く努力がなぜ平和時に行われないのか。なぜこの数十年、根本的な平和の確立ではなく、一時的な平和維持のために、ややもすると国際協力のエネルギーが傾注されてきたのか。危機管理より危機防止について、なぜもつと声高に議論しないのだろうか。危機管理が危機解決に代わる究極の手法であるように見えるのはなぜだろうか。

戦争がなければ平和という対蹠的見方がこれまで一般的であつたが、今こそ平和文化を推進するときである。現代に生きる我々にとっては、自分のみならず周囲の人との係わりなくして平和はない。この平和への道を達成するためには、まず自分自身の心の中に平和を保たねばならない。地球上のどこかに逆境が存在する限り、それは繁栄への脅威となる。この認識がとりわけ重要なのは、富めるものがますます富み、貧しきものがますます貧窮化する時代に生きているからだ。

直裁にして破壊的なテロに対し、宗教や民族主義の旗のもとに一刀両断し、最後通牒を突き付けてはならない。正義とは日常性を維持することにある。そうでなければ、我々が敵視するテロリズムがやがて勝利することになってしまふ。怒りは理解できる。悲嘆にくれるときは常にそうであった。しかし、怒りは対話への努力に振り向けるべきである。一つの宗教や、それを信仰する人々すべてを盲目的に攻撃するのではなく、正義は我々が

拠つて立つべき文明の英知に基づいて遂行されなければならない。

すべての市民は国籍のいかんを問わず、国際法、人権、そして人間としての尊厳によつて守られるべきである。マンハッタンで失われた生命の代償として、他の世界のどこかで無実の人が殺戮されるという事態はあつてはならない。

メディアは、この問題を余りに単純化し過ぎている。世界には多くの文化が共存しているが、我々は一つの世界に住んでいる。政府が国民に意見を押し付けるシステムは機能しない。普通の人々の声に耳を傾けるべきである。NGO、国連関係機関、世界企業、個人や市民社会等のあらゆるチャンネルを通じて彼らの声を伝えなくてはならない。

「味方か、しからずんば敵」というメディアの単純化された声に圧倒され、我々は普通の人々の声を反映させることができない。

衝突によつて死と破壊をもたらしたテロリストが、私の世界観に共鳴することはないとさう。彼らは、自己中心的で狭量な政治的背景のもとに、憎悪をたぎらせて立ちあがつた個人の集まりにすぎないからだ。「歴史の証言」として、実際にかつ真近かに見てきた前世紀は、非人道的行為を加速させるばかりであつた。もつと端的に言つてしまえば、過去千年と言つてもよいのだが、何としてもこの動きを止めねばならない。先人が築き引き継いできた環境、知恵、経験に鑑み、「本当に我々は正義を尽くしてきただろうか」と真剣に自問自答すべきである。そしてまた将来の世代に向かつても…。

---

我々は人類を人類自身の手から守らなければならない。アルダス・ハックスレーがいみじくも言つているように、「歴史が教えてくれた最も重要なことは、人間は歴史から何も学ばないことだ」。歴史からではなく、我々を引き継ぐ次の世代の可能性に賭けようではないか。

ニューヨークとワシントンで起きた今回の悲劇が何を意味するのか十分な検証がされ、同時にイスラム・アラブ社会の人々を含め、多くの国の人々が命を落としたことで悲嘆にくれた後に浮かんでくるのは、「いつたい次は何が起ころうか」という疑問である。悪に立ち向かうべく結束がなされているが、やがて、それらを超えた共通の理解が生まれて来るであろう。それは、国際的な意味で人道的、道徳的、かつ法的規範に立ち戻る必要性についての理解である。今こそ「正気と知恵のとき」である。

現在、地球上に生きている我々人類は、二十世紀の終焉を「世紀末」という百年の節目として迎えた以上に、「ミレニアム」という千年の節目として迎えたことについて、その運命と責任を感じざるを得ない。

言い換えるれば、これから的新たな千年を考えるとき、我々が手にする色々な可能性と乗り越えなくてはならない数多くの問題について、人類は多角的に検討しなくてはならない時期に差しかかっているといえる。

文明の進化とともに、我々は自己のアイデンティティを確立するため、言語、信仰、民族などに基づく帰属意識を次第に持つようになり、他との境界線をひく方法として「繩張り」から発展した「国家」という概念を持つに至った。

その後、国家がその権力を後ろ盾にしながら繁栄を追及した結果、本来あつた人類共通の精神的かつ道徳的な価値観が次第に失われていった。一方、人類と文明が進化する中で、我々は空前の科学技術の発展と繁栄がことさらに誇張された社会に生きているともいえる。

第二次世界大戦に続く諸々の出来事、ひいては、ごく最近起きた世の中の大きな変革から我々はいつたい何を学んだのだろうか。民族問題、地域紛争、南北問題、人口問題、環境問題など、人類が抱えている地球規模の数々の問題を解決することの前に立ちはだかる本来の障害は何だろうか。

例えば、今日、地球上のある場所で発生する出来事は、すべての人々に何らかの影響を及ぼす。すなわち、我々人類は共通の挑戦すべき課題に対し、敗れるか乗り越えるかに関係なく、全員がパートナーとして運命づけられともに立ち向かうことにして責任と義務を負っている。

それにも係わらず、このようないくつかの命題の前では、挑戦すべき課題が「人類の永遠のテーマ」として片付けられるがちである。我々は、今後直面するこれら大きな共通の問題に対し、単に夢想的な議論と検討でなく、かつてキルケゴー尔が忠告したように、「人類は、過去の経験に照らしながら、将来の問題を慎重に検討する」ことが必要である。これが、現代人類がこれから千年に亘り対して与えられた役割ではないだろうか。人類が再び頼るべき豊かな英知によって現在の国家概念を越え、リーダーシップを發揮すべき時期に来ている。

チエコのハヴエル大統領が、共産主義政権時代から一貫したグローバルな視点で、地球市民および市民社会について絶えず語っていたことはよく知られている。民主運動時には、先頭に立つてチエコスロバキアの民主化を市民に訴え、大統領就任後は、提供された演説の機会等を通じ、自らのイニシアチブで小さな国から世界へのメッセージを伝える機会を再び模索し始めた。ノーベル平和賞受賞者のエリー・ヴィーゼルは、ハヴエル大統領の考え方方に賛同し、協力してフォーラム二〇〇〇の設立を呼びかけることを決め、実現のために必要な態勢作りが行われた。会議は、人類の歴史上多くの知性を創造し、二十世紀後半

---

には市民の決断によつて大きな変革を遂げた象徴すべき都市プラハで開催することになつた。そして、フォーラム二〇〇〇財団が会議開催・運営のコーディネーターを主催者の意思のもとで実施する団体として設立された。

(注) 本文に登場する人物については、原則として敬称を省略し、役職名は各会議の開催当時のままとさせて頂いた。なお、フォーラム二〇〇〇会議の出席者については、巻末の Conference Participants (1997-2001) を参照して頂きたい。



# 時代の分岐点に差しかかった世界

I  
第一回会議 一九九七年九月三日～七日

## フォーラム二〇〇〇設立前夜

一九九五年三月二十九日、チェコのハヴェル大統領が、地球の反対側にあるオーストラリアを訪問した。東欧の優等生だったチェコスロバキアが旧ソ連の支配から解放されたのは一九八九年のビロード革命（暴力を伴わず、極めてスムーズに、まるでビロードのような滑らかさで革命を達成したことからこう呼ばれる）の結果だが、その後、同国はチェコとスロバキアに分離独立し、彼はチェコの大統領に就任していた。今回の訪問は、チェコ動乱・プラハの春以来、多くの難民をオーストラリアが受け入れてくれたことへの返礼を兼ねての訪豪であつた。

キャンベラへの二十四時間近い飛行時間中、大統領は共産党政権下における彼自身の反体制派劇作家としての長かつたデイシデント（国内で公人としての活動を禁じられ、失脚した生活を送ること）生活に思いを馳せていた。彼はスピーチを直前まで考えることが多く、内容はその場で決まることが多い。個人的な話をしたいと前置きしつつ、キャンベルの記者クラブで行つた次のようなスピーチも、そうしたものであつた。骨子は二点あつた。

「一九六〇年代のごく一部の期間を除いて、母国を離れることは禁じられていました。こ



ヴァーツラフ・ハヴェル大統領（左）とエリー・ヴィーゼル

うした状態が何十年と続くうちに、惰性とでも言うのでしようか、他の国を訪れるることは生涯あり得ないと思うようになつてしましました。とりわけ、オーストラリアのように遠く離れた国へは、他の星に向かつて飛び立つか次の世紀に踏み込むような気持ちでした。飛行中、私は地上を眺めました。そして、人が殺し合つている戦場のいくつかをアツとう間に飛び越して、この地にやつて來たのです」

「人類は地球上の至るところで自給自足的な生活を数千年にわたり営み、文明や文化が興つてはまた衰退していきました。一部の例外を除くとそれらは特定な領土内に留まり、地球全体に直ちに影響を与えることはありませんでした…」

大統領はこの後、我々が直面しているグローバリゼーションに言及し、価値観を変えない限り人類は衰退するしかないという結論に導く。

このスピーチを聞いたとき、私はさして興奮しなかつた。個人として共鳴するものは多かつたが、経済人類学者からすれば自明のこととて、要は社会がそれを決断するかどうかの問題であったからだ。一九八九年のビロード革命後、大統領が海外で行つてきたスピーチが、地球規模での人口爆発、環境汚染、北と南の貧富の拡大、核拡散と大国の霸権主義、大量消費と物質主義などに触れてきたからだ。突き放した見方をすれば、大統領の問題提起は地球が直面している問題の反復・羅列にすぎず、自らの回答・提案が欠けていることにもの足りなさを感じた。

しかし、政治の世界で知性主義を臆面もなく、かつ諦めることなく訴え続ける大統領のナイーブさには瞠目させられるものがあった。政治家としては余りに現実離れした思想とインターナショナルな視野の広さにむしろ驚かされた。同時に、民主化と移行経済に没頭する中欧諸国指導者の一部が、彼を空想主義者と囁いている背景が何となく分かるのだった。

その後、大統領とプラハ城で会う機会を何度か得たが、驚いたことにこのスピーチの思想の具現化を彼は真剣に考えており、いかに実行に移すかに腐心していた。志の低い政治家が多い中で、彼の真摯さとひたむきさは、命を賭けて人間の尊厳を主張してきたものだけが持てる特権でもあった。

「近い将来、世界の最高の知性をこの城に集め、人類の過去の遺産と将来への展望について語れるようなシンポジウムを開催し、次の世代への課題として言い残しておきたい。ついでには、日本およびアジアに関して意見を聞きたい」とのことと、昨年、私は昼食会に招待された。ハヴェル大統領は、二十一世紀においてアジア太平洋地域が世界の中でも中心的役割を担うまでに発展・飛躍すると信じており、「この中欧のプラハから、ヨーロッパとアジアの橋渡し役を演じたい」と木訥に話すのであつた。この愚直なまでのナイーブさこそ彼の真髓であり、チェコのみならず世界の多くの識者を動かす魅力であつた。

## 「道徳を再発見することが究極の願い」

旧ソ連を始めとした東欧の共産党政権が自壊する過程で、一九八九年、チエコスロバキアでビロード革命が達成された。学生と多くのインテリが中心となつて、静かにかつビロードのようなスマーズさで改革を進めたがゆえに、革命はそう呼ばれている。革命の美酒に酔う国民の「ハヴエルをフラツチャニー（プラハ城大統領官邸の別称）へ」と叫ぶ熱狂の中で、彼が初代大統領に選出された理由は、文学表現に頼りながら抵抗を続けてきた強固な意志とナイーブさが支持されたからであつた。周辺の大国に運命を翻弄されてきたチエコでは、第一次大戦以来、暴力によらず言論で対抗する意識が国民にしつかりと根付いていた。

ルドルフ二世によつて建てられたプラハ城の北ウイングから長い廊下をつたい、十八世纪に新たに建設された南ウイングを経て、ようやく大統領の執務室に至る。一九三八年、ミュンヘン協定によつてチエコ共和国をドイツに併合したヒットラーが、この執務室から美しい百塔の街プラハを見おろし、世界制覇の野望をいだいた歴史的な場所である。ヒットラーは、同じように中欧の歴史を封じ込めてきたポーランドのワルシャワを徹底的に破壊したのに、なぜかプラハには手をつけなかつた。

驚いたことに、秘書官控えの部屋と執務室とをつなぐホールには、アールデコ風にアレンジされた鳥居が壁一面に書かれているのだった。京都を訪問したときにヒントを得たのだという。ハヴエル大統領の文化人としての側面を見た思いだつた。

我々のために、彼がわざわざ用意してくれた昼食会でのことであつた。そこには、チエコを代表する知識人がハヴエル大統領のお声がかりで同席していた。フォーラム二〇〇〇企画委員会を発足させる実質上の機会となつたこの昼食会で、大統領は遠路よりやつて来た我々を歓迎する挨拶から始め、途中からは彼独自の文化論へと話は展開、発展していく。要約すると次のようになる。

「人類は歴史上初めて一つの家に住んでいるということを実感できる時代を迎えたが、その家にはいくつもの文化が混在している。残念ながら、それぞれの文化は対立的であるゆえお互いに発展することができず、競争に明け暮れている。今この矛盾に気付き、それを強調しなければ家の運命は目に見えていい。グローバルな共同体意識しか人類を救うものはないが、それを一つの文明に求めるべきではないし、かつ依存してはいけない。これはきっと多面的なものになるはずで、様々な文化における違いよりも、できるだけ多くの共通点を強調すべきなのだ。我々は、なぜ文化の違いを強調するのだろうか。自国のアイデンティティを強調するためだろうか。この頃、私はつくづく考えている。できれば、こうした命題について広く有識者を集め検討してみたい。それが私の願いなのだ」

引き続いて正式な午餐会へと移つていき、昼食時ということと彼の人格のおかげもあって、参加者全員がリラックスし、それぞれが勝手に話し出したのだった。

もちろん、大統領の気配りが利いていたことは言うまでもない。彼は十人近いチエコ側の出席者の一人ひとりについて、バックグラウンドを含め懇切丁寧に説明してくれたのであつた。当然、我々もそれに応じ、チエコと日本側出席者の間に和氣あいあいとした雰囲気が醸し出されたのである。

そうした中で、チエコ側の学者が日本の戦後の高度経済成長と日本人の道徳に関連した話を持ち出すと、別の学者がドナルド・ドナーの書いた『英國の工場、日本の工場』に言及しながら受け継いだ。

「あの本で、道徳と経済成長は関係ないと確か彼は書いていたはずですが…」

このとき、ハヴエル大統領が身を乗り出した。自説を展開する必要を感じたのだろう。「私は空想主義者だから」と発言者に気を配りつつ話し始めた。

「道徳と経済成長は切つても切れない関係にあります」と前置きしながら、「経済成長を達成するためには一定のルールが必要です。ルールを遵守することで、発展が保障されるのです」と明言し、次のようにも述べた。

「ルールをルールとして遵守させるものは、道徳ではないでしょうか。ものごとを本質に立ち戻つて考えると、人類四千年の歴史の中で、原理・原則はとうの昔に分かつていたは

ずです。それが現在守られていない」

「訥弁の雄弁とはよく言つたもので、最後には出席者全員が大統領の意見を傾聴しているのであつた。

「道徳を再発見することが究極の願いですが、実現できていません。それは、個々の人間を尊重するという絶対の鉄則が無視されていることに、恐らく原因があるのでないでしょうか」

こうして、ハヴエル大統領の長いスピーチは終わったのだった。しかし、彼は同席したゲストに注文をついたようにも思えた。

大統領は劇作家の顔に戻り、冗談が頻繁に出るほどの余裕ぶりであつた。その基本には、人間の原点にあくまで立ち戻ろうとするヒューマニズムの精神が発露されていた。

話の中で、特別に心に残ることがあつた。唐突に近いかたちで、彼はゲストに「お客様を迎えるというシーンを想定してみて下さい」という想定問題を与えたのだ。

しばらく沈黙した後、独り言のように続けた。

「そのときのルールは何か。相手を殺さないというのが絶対の基本であり、究極の真実ではないでしょうか」

国家が究極の暴力装置になる危険をどう避けたらよいのか、大統領はアンチテーゼとして我々に問うていると感じた途端、緊張せざるを得なかつた。そして、こうした原理・原

則を一国の大統領が何のためらいもなく、誰に対しても言つてのけられる環境が羨ましかつた。

なぜ彼はチエコの希望の星なのだろうか。圧倒的というより、国民の百%の支持を受け大統領に選出されてから八年が経過している。その間にスロバキアの分離独立があり一時大統領を辞しているが、いまだに国民の支持率は七〇%を下らず、絶対的信任を受けていると言つてよい。

ビロード革命時、ハヴエル大統領と一体となつて行動した弟のイワン・ハヴエルは、中欧最古の歴史を誇るカレル大学人工知能研究所の教授だ。私はチエコを訪問すると決まって夫妻と食事をともにする。彼は知的交流コロキアムを主催していることもあり、ヨーロッパのあらゆる分野の学者と交流できるのが最大の魅力である。しかし、何よりも弟として兄の大統領をどう見ているかという身内の意見を聞けるのが財産だ。

数多く聞いたエピソードで印象に残っているものに、地下出版活動がある。一九七〇年代、大統領夫妻がチエコスロバキアの知識階級の期待を一身に背負つて、非合法の地下出版活動に明け暮れていた頃のことである。ハヴエル大統領がチエコスロバキアの英雄に祭り上げられた理由は、名声よりも自らの作家生命を犠牲にして、他の作家のために奔走したこの非合法出版活動にあった。

旧ソ連、東欧圏で言論の自由を封じられてきた知識人は、共産党政権の強権政治の暗部

を伝えるべく、非合法地下出版活動を通じて反体制派の連帯を強化していた。彼らは生命の危険を犯しながらも、手書きや簡単なガリ版印刷で出版活動を細々と続けてきたことはよく知られている。私も大学時代、国際共産主義運動史を勉強していたことから、活動の概要是おぼろげながら知っていた。西欧のメディアと政策立案者、共産党政権の崩壊に手を貸していた亡命者団体が、印刷物をあらゆる手段で入手し新たな形で出版することで、反ソ連キヤンペーン活動の一翼を担つていたことは、アメリカ政府が出版する雑誌『コミニズム』を通じて承知していた。しかし、この「サミズダット」と呼ばれる地下出版活動が、日本のマスコミに取り上げられることはまれであった。それゆえ、サミズダットこそ共産党政権を転覆すべく反体制の思想家が命を賭けている地下活動であり、出版物の内容も政治色が強いというイメージが持たれたのは当たり前かもしれない。

弟夫妻は、こうした誤解をものの見事に払拭してくれた。また、人間の尊厳を破壊する怪物のような政府組織に、ハヴエル大統領がいかに柔軟な思想でぶつかつていったかを淡々と解説してくれたのであった。

ちなみに、サミズダットはロシア語の合成語で、「自分たちで」を意味する「サム」と「出版所」を意味する「イズラーテリスト」という二つの言葉からなる。十月革命でソ連共産党が国家権力を掌握したことに対し、ギリシャ正教会がレーニンに抗議する文書を密かに配布したとき、この言葉が使われた。

チエコにおける地下出版活動は、一九五〇年代から本格化した。ソ連で禁止された古典をチエコ語に翻訳することから始まり、自分たちの本、詩集、雑誌、新聞発行にまで活動は拡大していく。ただ、彼らはイデオロギーで共産党と対決する姿勢をとることはなかつた。活動の動機は、あくまで作品を通じて、自分の思想や考えをできるだけ多くの人に訴えたいという人間の根源的欲求を満たすことについたという。当局が恐れたことは、出版の自由が共産党政権の土台を侵食するのではないかということであつて、確かに出版を反体制行為と見なしたもの、反政治的行為であるとは一切言わなかつたという。作品を世に訴えたいとする衝動をいかにして実現させるか、ハヴエル大統領や同僚作家は悩んだ。そして、仲間のルドリーカ・バツリーカが苦肉の策を思い付いた。それは、自らの署名入りで本を出版し、「この本のコピーを禁ず」と書き添えることで、コピーを配布するというものであつた。このチエコ語の文章の頭文字をとると *Vztor* であり、「抵抗」という意味になつていた。

事業に本格的に取り組み、更に発展させたのがハヴエル大統領夫妻であつた。地下出版を希望する作家たちに代わつて、夫妻が署名することを決めたために、当局に睨まれた二人は刑務所と家の間を交代で行き来することになつた。逮捕されたとき、彼らは決まつてこう抗弁した。「自分の興味で自家用に少数コピーしただけです。広く世間に知らしめる気は毛頭ありませんでした」と。作家は作家で、自分は出版に関与していないと主張でき

た。印刷物には決まってハヴエル夫妻のどちらかが署名していたからだ。こうして、ハヴエル夫妻はチエコの知識人すべての身代わりとなつて、出版を保障したのである。知性に誘発されたビロード革命のマグマが、この地下出版活動なのであつた。

### フォーラム一〇〇〇会議のスタート

革命を通じてハヴエル兄弟が体験したことは、チエコに特有のものではなく、人類が共有し学ぶべきことが多々あるようと思えるのだった。

依然として、世界では超大国による覇権主義が幅を利かせている。アフリカ、バルカンでは偏狭な民族主義が跋扈し、エスニック・クレンジングと呼ばれる民族虐殺が依然として起ころっている。

新しい世紀は間近に迫っている。ハヴエル大統領の理念に沿つて、世界中の識者が今後の人類や地球のあり方についてブレイン・ストーミングをするのは、決して無駄なことではあるまい。こうした考えに共鳴し、多忙な時間を割いて参加してくれる世界の識者がどれほどいて、経費がいくらかかるかといったテクニカルな問題を解決できれば、これは実現可能と思われる。

ただ残念なことに、チエコを始めとする中欧諸国は移行経済と民主主義導入に忙殺され

ており、財源はおろか十分な人材の確保さえおぼつかない。ならば、彼らに比べて少しは余裕のある日本がその分を補足すれば済む話であった。こうしてフォーラム二〇〇〇はスタートしたのであつた。振り返つてみると、社会がいかに複雑・細分化されようと、新しい試みはごく限られた人間の思想と行動から始まることを改めて認識したのであつた。

一九九七年九月三日、プラハ城にノーベル賞受賞者十人を含む識者六十人が世界中から参集した。三日間にわたつて、大統領念願のブレイン・ストーミングが開催されたのである。大統領府が負担したのは、ビジネスクラスの航空運賃とホテルの滞在費だけであつた。参加者は、ドライ・ラマや南アフリカのアパルトヘイトを撤廃させたフレデリク・ウイлем・デ・クラーク前大統領、コスタリカ前大統領でノーベル平和賞受賞者オスカー・アリアス・サンチエス、パトリシオ・アルウイン・アソカール、ホセ・ラモス・ホルタや、アフリカ作家として初めて文学賞を受賞したウォール・ソインカなど、多士濟济であつた。(会議の詳しい内容は、公式議事録のほかフォーラム二〇〇〇財団のホームページ <http://www.wforum2000.cz>などを通じて公表されている)

参加者が共通して抱いた認識は、国が地続きで国境を接することがいかに緊張感を強い、民族間の紛争を招くかという危機感であつた。ボスニア・ヘルツェゴビナやチェチエンの紛争にも、「明日は我が身」という脅迫観念が働いていた。だからこそ、「過去の負の歴史を脱却しない限り、明日への希望は生まれてこない」というハヴエル大統領の信念、ナイ



全体会議

ーブさに彼らは期待をつないだのだ。

出席者の顔ぶれもざることながら、この大舞台を成功させるべく一年にわたって準備に携わってきた裏方にも感嘆せざるを得なかつた。チエコ、アメリカ、日本の財團を含め、五つの財團が会議の受け皿としてフォーラム一〇〇〇財團という新しい財團を設立したのだが、急遽集められた人材のほとんどが大学院生しかも女性であつた。

彼女たちは、語学に堪能なだけではなかつた。開催一カ月前になると朝六時に事務所に顔を出し、帰るのは深夜ということが週末まで続いた。それでも、一人として嫌な顔をしない。会期中、いつも笑みを絶やさず生き生きとプラハ城内を駆け回る姿を印象付けられた人も多い。彼女たちをリクルートした、大統領府のサイフター長官の言葉が忘れられない。サイフター長官は、共産党政権時代に大学教授の職を追われ、三十年余の間ビルの窓拭きで生計を立ててきた男だ。

「若い人と仕事をするほうがずっと嬉しい。それに、彼女たちは私たちより立派に仕事をやってのけますよ」

日本に帰国すると、内閣改造と有罪判決を受けた代議士の大臣就任を巡つて、国の機能が麻痺するほどの騒ぎの最中であつた。世界の潮流との歴然とした乖離を感じざるを得なかつた。これも、国境を接しない島国の宿命なのだろうか。

ここで、ハヴエル大統領と弟のイワンとの兄弟仲を巡るエピソードを紹介しておこう。

フォーラム二〇〇〇会議の会期中、ハヴエル大統領は一度だけごく内輪の席で英語によつて話をしている。同席していたのは、コスタリカのサンチエス前大統領、ノーベル平和賞受賞者ヴィーゼル、ハツサン皇子など、ごく限られた人物だつた。初めて聞く彼の英語は、我々の想像を遥かに超えて流暢だつた。私はイワンの言葉を思い出した。

「刑務所に行くたびに言つていたのですよ。『やがて英語が必要になるから、獄中では英語の勉強をしたほうがいい』つて。もちろん、いろいろ手伝いましたが」

会議終了後、その話をハヴエル大統領に伝えると、「そうでしたか」とぽつりと言つて嬉しそうな表情をした。

イワンは過去を思いやるよう、「個性の強い兄貴でしてね。僕はいつもいじめられていたな。僕とて個性が弱いつてことじやなかつた。でも、兄貴の強い個性には叶わなかつたつてことかな」と呟くのだった。二人の間にも兄弟間特有のライバル意識があつたことが嬉しかつた。

## 厳重な警戒のもとで会議開催

今回のフォーラム二〇〇〇会議は、大統領府、外務省、また実際の準備・受け入れを請け負つたボヘミア財團、パトリエ財團、日本財團にとつても初めての体験で、戸惑うこと

が多かつた。前例がないだけに、すべてが試行錯誤であつたと言つてよい。大統領の鶴の一聲でプラハ城を三日間にわたつて公開し、連日四百人から五百人が入れ替わり立ち替わり出入りすることは、治安上からも大きな問題であつた。

大統領府に立ち入つたものであれば分かるのだが、人間を誰何されるばかりか持ち物をすべて点検され、更に相手が出迎えに玄関まで来ないと大統領府には入れてもらえない。いわんや大統領が住む公邸（幸か不幸か、ハヴエル大統領は公邸に住むのを嫌い、自宅から通つている）を事務局に開放したものだから、我々日本人は毎日正面玄関で近衛兵にブロックされるという不都合に直面せざるを得なかつた。しかも、近衛兵は観光の目玉となつており、一日に何度も交代する。交代が見せ場なのだ。整列して兵舎から出て来た近衛兵が、銃を捧げながら仰々しい交代の儀式を繰り返す。観光客にとつては絶好のカメラのシャッターチャンスだが、事務局で働くものにはなんと面倒なことか。舞台の裏方になつて初めて実感する貴重な体験であつた。

プラハは石で造られた街で、ほとんどの建物に地下室がある。それも、何世代もかけながら石を積み重ねてきたことから、種類の違う石が雑然としている。場所によつては十四世紀から二十世紀までのロココ調、バロック調、ロマネスク調とそれぞれの特徴を残しているものさえある。そうした場所は、名所・旧跡となつて高級レストランやバーとして繁盛している。事前準備を含め、一週間以上にわたつてプラハ城を思いのままに探索できた

のは、好運としか言いようがなかつた。

城には時代に合つたあらゆる防衛策が施されている。基幹となるのは、蜘蛛の巣のよう  
に張り巡らされたすべての施設をつなぐ地下回廊なのだ。

開会式は、そうしたプラハ城に併設された由緒あるヴァーツラフ・ホールで開催されることになつた。かつて、貴族が馬上のまま会場に乗りつけられるように造られた大ホールだけに、全フロアはいまだ板敷きである。大統領執務室からここに到着するには一度外に出なければならないが、年間の観光客が五千万人を超える観光立国そのため、城内すべてを立入禁止にすることはできない。いつたいどうやつて先導するのか心配顔をした私を見て、大統領顧問がニタリと笑つた。「ミスター・ホリ、心配いりませんよ。秘密の回廊を通り、ヴァーツラフ・ホール付属の尖塔にたどり着くことができますから。もし、よい写真を撮りたいのなら、大ホールの前には絶対に行かないように。一番後ろの右隅にいて下さい。そこが先頭の行き着く先です。退場もすぐそばにある『開かずの扉』を開けることになります。ハヴェル大統領が退席したらすぐに統いて下さい。そうしないと千人近い出席者が後から押し寄せて混雑しますので、大統領に近づくことさえ出来なくなりますよ」と脅かすのであつた。

日本からは、事務局への支援者を含めて二十人を超える参加者が大挙してプラハに押し寄せ、公式プログラムにはパネリストとして三人が参加した。日本の報道機関からは読売

新聞、NHK、日本経済新聞社の記者、その他ヨーロッパばかりでなく、ワシントンやニューヨークからも報道関係者が駆けつけ、総勢は百五十人を超えていた。会議の間の休憩時間には殺到するインタビューに追われ、コーヒーを飲むのさえまならないほどの忙しさであった。

私のイニシャルは英語でT・Hとなる。このおかげで、同じイニシャルを持つコンティキ号の冒険で名を成したトル・ヘイエルダールと三日間隣り合わせになる幸運に恵まれた。南太平洋と海、ダイビングと考古学、人類学など関心事項も共通で、大学院の講義を独り占めしたような気持ちであった。

彼を追いかけるマスコミも頭抜けている。コーヒーブレークの際は、どうしても二人で対話をしながら会場を出ることになる。廊下に来た途端、マスコミのカメラが一斉に動き始めるのだが、図々しいディレクターは見ず知らずのこちらにさえ注文をつけ、「そのまま話を続けろ」と指示したりする。有名人の憂鬱が分かるような気がしたものだった。

## プラハで開催した理由

初めてのフォーラム二〇〇〇会議であり、かつ中欧の歴史的文化遺産が多いプラハで開催されたことから、かなり華やかな催し物がシンポジウムと併せ行われた。圧巻だったの



スマーナ劇場での音楽会

は、スメタナ劇場での音楽会であろう。プラハ交響楽団の参加はもちろんのことだが、世界で最も売れっ子のソプラノ歌手、バイオリニスト、チェロ奏者が企画に賛同し、大挙してアメリカから駆けつけてくれた。その中には、チャイコフスキーオンコングルを始め世界の音楽賞を総なめにしたチエリストのミシャ・マイスキー、あるいはオペラ歌手のテリー・クックも含まれる。日本に呼ぶとしたら、一人で軽く二千万円は要求されるといわれる超一流のカメリア・ジョンソン、バーバラ・ヘンドリックス、マーヴィス・マーティンが一堂に会した雰囲気に圧倒されたのは、我々だけではなかつたはずだ。

ただ、コンサートの運営について、一部の人から讐讐をかつたのも事実である。なぜなら、アメリカのプロモートぶりが余りに正面に出たために、その力を誇示する典型的な「アメリカン・ショー」に墮してしまつたからだ。総合司会的なナレーターも有名なアメリカの俳優で、グレゴリー・ペック、ジェイムス・アール・ジョンズならびにリン・レードウグレーズという錚々たるメンバーであつた。

これだけの企画・運営をするとなると、ハリウッドを牛耳るユダヤ系プロデューサー、エージェントによつて仕切られるのは避けられず、知らないうちに極端なまでのシオニズムが強調されてしまつたのであろう。

日本人は、それなくとも民族意識や差別に疎い。とりわけ、中欧におけるユダヤ人の運命を知らないために、短絡した判断に陥りがちである。過去の歴史を振り返つてみると、

その背景がよく分かる。第二次大戦中、チエコがドイツに割譲されたことから最も積極的にユダヤ人狩りをされ、多くの人々がこの地からアウシュビッツに送られた不幸な歴史があるだけに、解放され市民権を回復した喜びを單刀直入に表したい気持ちも理解できるのであつた。

会議終了後、ユダヤ人を対象とした初期の強制収容所テレジンを訪ねた。ここは、アウシュビッツにユダヤ人を送り出した収容所として名高く、人類の愚行を永遠に後世に伝えねば、刑務所に当たる場所が博物館になつてゐる。チエコ国内で七万四千人のユダヤ人がこのゲットーに押し込められ、終戦まで生き延びたのは一万人以下だつたといわれる。

テレジンが他の強制収容所と違うのは、街全体がチエコ各地から強制移動させられたユダヤ人のために作り替えられたことであつた。高い城壁で囲まれた街は、自治区を形成していた。ゲシュタポが考えた当初のアイデアは、チエコ全土のユダヤ人をここに押し込めることであつた。これは、一生を壁に囲まれた街で終焉させるというもので、人為的ポグロムまでは考えられていなかつた。それゆえ、街には幼稚園からカレッジ、図書館、病院までもが建てられている。

こうしておけば、長い時間はかかるがやがてユダヤ人は死に絶えるという発想で、世界からの非難を避けることができた。街の一部を公開し、彼らが自治をエンジョイしており生活には不自由していないという映像を通じた広報活動に、ゲシュタポは力を注いだので

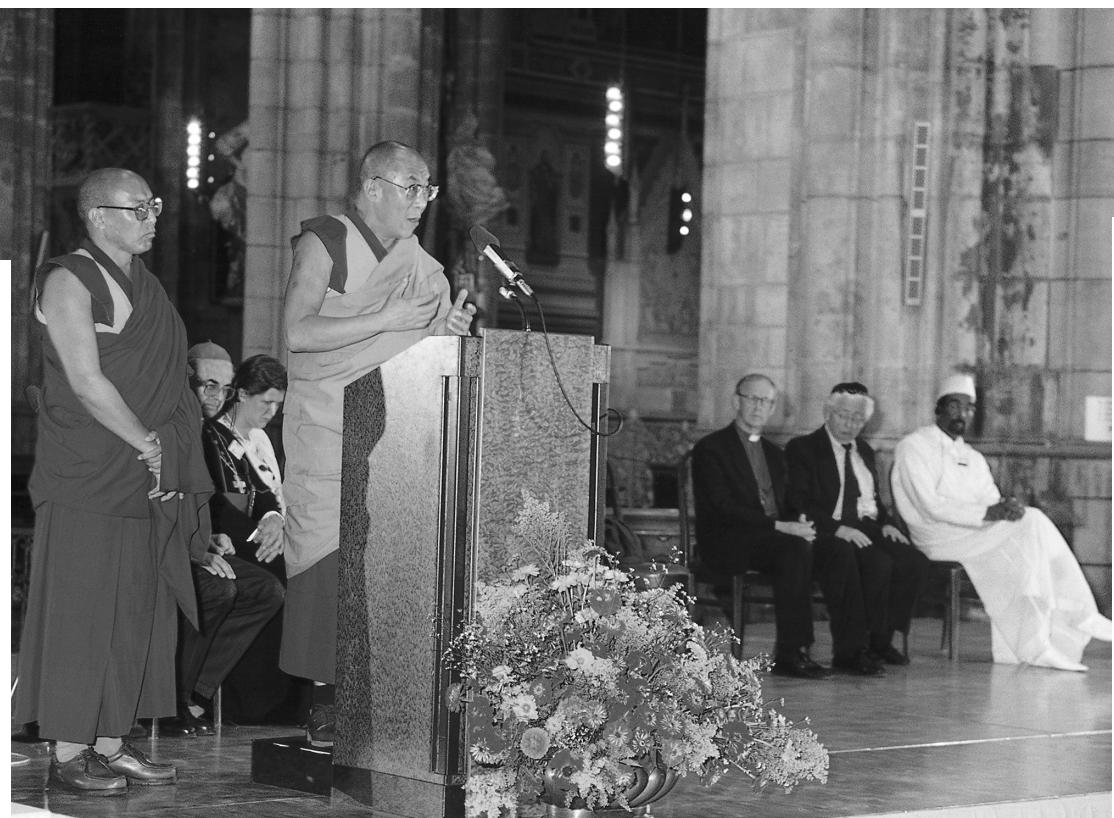
ある。歴史を知るには現場に立つことがいかに重要か、私は改めて認識したのであつた。

テレジンは、古くはオーストリア・ハンガリー帝国の首都を守るための要塞であり、街全体を堅固な城壁で囲んだことが災いし、ゲットーに化したのであつた。星型の街は、各先端部が前進的防衛基地という独自の機能を持つていて、五稜郭を大規模にしたものと想定すればよい。ゲシュタポは、当初チエコでレジスタンス運動に従事する政治犯を先端部に収容していたのだが、一九四〇年からユダヤ人とジプシーを収容する強制キャンプに改裝したのである。

正面入口にはアウシュビッツと同様、「ARBEIT MACHT FREI（労働のみが自由につながる）」という意味のスローガンが掲げられている。私は当時のありのままの姿を残す収容所を終日見て歩いたが、人間が持つ残酷さに絶望せざるを得なかつた。同時に、ハベル大統領がこの地でフォーラム二〇〇〇会議の開催を提唱した理由が理解できたのである。

フォーラム二〇〇〇会議が開催されるに至つた経緯ならびにその評価を、参加者あるいはオーガナイザーの一人として思い付くままに述べてきたが、幸いなことに、この会議において第一回会議を一九九八年十月に実施することが決定している。

これは、第一回会議の終了後に、毎月一回の頻度で開催し会議自体の評価をしてきたプログラム委員会が、出席者や傍聴したジャーナリストの意見を集約し、前向きの評価を得



演説するダライ・ラマ

---

た結果である。ハヴエル大統領との打ち合わせでも、二〇〇一年までは継続していくことが了承された。「結果は神のみしか分からぬ。しかし、こうした眞の対話は継続することに意義があり、間違いなく将来への試金石である」というハヴエル大統領の言葉が最終判断となつた。

地球市民として世界の平和と秩序を今後も維持するためには、過去の過ちを見つめ直しながら、人類が抱える問題の一ひとつをあらゆる角度から検討し、解決の方向性だけでも見つける機会を與えたいという壮大な夢が、フォーラム二〇〇〇の基本姿勢である。

II

第一回会議

一九九八年十月十一日～十四日



グローバリゼーション—実証、体系、構想・概念—

## 反省と新機軸の構築

チエコのハヴエル大統領が世界の指導者と識者に向かつて、英知を絞り地球規模における人類共存のための新しい思想を打ち出そうと呼びかけたのは、一九九七年のことであつた。その意思を受けフォーラム二〇〇〇が発足し、第一回会議が九月三日から七日までプラハ城スペイン・ホールにて開催された。

第一回会議では、実質的な討議だけでなく大統領府が総力を挙げて諸々の歓迎イベントを併催したことは記憶に新しい。マスコミは出席した世界の鋭々たるリーダーの顔ぶれにまず関心を示し、国民は企画に賛同してアメリカから駆けつけた世界有数のオペラ歌手の競演に酔いしれたのであつた。その意味で、若干お祭り騒ぎになつたことは否めない。

また、長い間共産党の支配下に置かれてきたチエコが解放され、プラハの春が名実ともにやつて来たのも事実であつた。会議には、再びヨーロッパの中核的役割を担うことになつた喜びを、世界に高らかに訴える政治的マニフェスティションの意味合いが含まれていたことも確かだろう。いずれにせよ、フォーラム二〇〇〇は中欧の持つ洗練された啓蒙的精神の表現を世界に印象付けることに成功したのである。

意を強くしたのは、ハヴエル大統領が超人的な気力をもつて会議に献身したことである。



ヒラリー・クリントン（中央）とハヴェル大統領夫妻

彼は開催前の短い期間に小さな手術を加えると五回、しかも一回は心臓停止状態で、それを電気ショックで蘇生させて危機を抜け出した。出席者は彼の元気な姿を目の前に見て、新たな感動を覚えたのであつた。

大統領は四日間の会議開催中、ほとんどのセッションに出席するという熱の入れようであつた。その間に各国首脳との個別会談や晩餐会が入り、肉体的疲労は限界を超えていたはずだ。人間の決死の覚悟とはこういうものなのか、彼だからこそチエコに革命をもたらしたのだと改めて納得したのだった。残念ながら、人間の資質には大きな差があることを否応なく認めざるを得なかつた。しかも、二日目にはオーストリアの大統領との対談のため、会議を途中で抜け出し大統領専用機でウイーンに向かい、対談を終えるとトンボ帰りし、午後四時には何気ない顔をして会議に出ていたのであつた。その後は、パネリストとして参加した前米大統領夫人のヒラリー・クリントンを主賓とする晩餐会をやつてのけたのだった。ハヴエル大統領は、これだけのスケジュールをこなしつつ、その合間に日本財団の笛川陽平理事長との個別会談や来年度のフォーラム二〇〇〇に関する戦略会議にも顔を出し、意見を述べたのだった。

会議の内容については、昨年と比較すると次の点で大きな違いが見られた。

一、世界の各界を代表するリーダーが招待の対象となつたものの、参加者の数が昨年に比べ大幅に絞られた。世界の識者が専門領域の話を開陳する限りなんら問題は生じないが、

今回のように普遍性を持つテーマでは、極端に言えば六十の異なった意見が出される可能性があつた。前回の会議では、議論は収束するどころか拡散かつ焦点を失いがちであつた。三日という時間をいかに上手く配分しようと、六十人の参加者が全員発言するとなると極めて限られた時間しかない。参加者数を絞つたことは、本質的な討議に入ることができなかつたという昨年の会議の反省に基づいている。

二・ノーベル賞の受賞者だけでも十人以上いて、そうした著名人をマスコミが常に追いかけた結果、会議のテーマとは直接関係ない話題を報道するメディアも多かつた。従つて、国民に会議の趣旨が徹底せず、誤解される危険性が生じた。事実、「これほどの予算を大統領府が浪費するのはけしからん」という見当違ひな意見さえ一部に出た。

三・世界中から参加する人の旅費、滞在費をフォーラム二〇〇〇財団が全額負担するため、予算の中で固定費がかなりの比率を占め、今後の展開に支障をきたす恐れが出てきた。更に、プログラムの進め方についても検討が加えられた。その結果、ハヴエル大統領の健康ならびに大統領府の負担を少しでも軽減するため、フォーラム二〇〇〇のプログラム委員会と事務局に幅広い権限と裁量権を付与することで、今後の持続的発展、運営を期することになった。プログラム委員長にはカレル大学のジリ・ムシル社会学部教授が、事務局長にはロバート・ブルムがフルタイムで就任することに決定した。

会議をより実りあるものにするため、各セッションのテーマを細分化し、基本的にはデ

イベート方式で会議を進めるようにしたことも画期的な改良点であつた。

すなわち、テーマに関しては世界的な権威者を二人選定し、意見は全く相反する立場にあることを基本とした。そして、間に立つて問題の所在を鮮やかに引き出せる中立的な立場の人物を、できるだけ早い時期にコーディネーターとして選任することが決められた。指名を受けたコーディネーターは責任を持つて二人の識者と事前に意見を交換し、それを踏まえたうえで会議に臨むという方式も採択された。また、昨年の会議との整合性を維持するため、人権問題については必要に応じ臨時セッションを設け、傍聴者にもフロアを開放し意見を述べる機会を与えることも承認された。

ただ、ヒラリー・クリントンならびにヘンリー・キッシンジャー元米国務長官が会議全体のテーマを踏まえて基調演説をしたことが、今回の流れを決定的にしたことは否めない。これは、当初予定に入っていたにも係わらず、テーマがアメリカの外交姿勢と密接に関連しているため、アメリカ政府自体が熱心にフォーラム二〇〇〇会議への参加を求めて、急遽、公式プログラムに加えられたのであつた。

この点に関しては、ハヴエル大統領とホワイトハウスの間で極めて高度な政治的話し合이が行われたらしく、スポンサーの日本財團も詳しい経緯については知らされていない。結果がよかつたかどうか判断するには少々時間が必要だが、両者がプロポカティブ（挑発的）なスピーチを行つたため、その後の三日間にわたつて議論が二人のスピーチに収斂す



ヘンリー・キッシンジャー元米国務長官（左）とハヴェル大統領

ることは避けられなかつた。

グローバリゼーションというテーマ選定については、プログラム委員の中からも意見が百出した。「グローバリゼーションは世界のアメリカナイゼーションだ」という意見から、「世界の中心たる西欧が辺境にあるアジア、アフリカを更に貧困化させる『新たな植民地化』の過程である」という極論すらあつた。ただ、フォーラム二〇〇〇では、少なくとも今後の百年を踏まえた議論をすべきで、現代社会を反映するイデオロギー的発想はできるだけ避けるように努めることになった。

### 学生代表を公式に招待

第二回会議は所期の目的を達成し無事終了したが、その後理事会とプログラム委員会が相次いで開催され反省と来年への展望を踏まえた総括をしたので、その概要を報告しておきたい。

どんな会議でも、継続が成果を達成する力の源泉であることは間違いないが、同時に會議へのコミットメントあるいはブレイン・ストーミングの過程において、時間をかけねばかけるほどマンネリ化する危険も避けられない。こうした点は人間の本質に係わつてくるものだけに、解決策は容易に見つからないものだ。

フォーラム二〇〇〇も例外ではない。二度の会議が取りあえず予想した方向で収束したことと前向きに評価する委員と、逆に反省に力点を置き将来に備えるべきとする委員に大別されるのは必然の結果でもある。従つて、ここでは双方の意見を集約した形でお伝えする。

第二回会議を成功と結論付けた要因として、二つの流れが考えられる。まず、第一回会議の反省を踏まえて会議の目的と議題が絞られ、それに応じてテーマに沿つた専門家を會議に招待できたという評価である。次に、過去に大きな業績を残したり貢献をした人物の意見を尊重する点については少しも認識に変化はないが、将来の社会を担う学生代表を會議に公式に招待し、若い世代が持つ意見を積極的に発表できる機会を与えることができたという評価である。

学生代表のフォーラム二〇〇〇会議への公式出席は、今後の会議に間違いなくある方向性を与えた点で全委員が高く評価し、以降の出席にも好意的であった。ただ残念だったのは、予算の関係もあり、大半の学生がヨーロッパ中心に選考されたことである。もちろん、限られた予算内でできるだけ地域的配慮をするように心掛けたが、結局はヨーロッパに留学中の学生代表に限られ、彼らがアジアやアフリカの眞の声を代表したかどうかについては一抹の不安が残る結果となつた。

それでも、父親がチエコに外交官として在住するインドの留学生が、「グローバリゼー

ション・プロセスのためにインドの大学ではローカリゼーションが著しく、学生が人生の

目標を失いつつあるのが懸念される」と指摘したのは的をついた若者らしい発言であつた。

「だからこそ、教育問題について地球規模で話し合うべき」と提案したときには納得させられるものがあつた。

彼女はこう指摘する。

「かつてインドでは、ニューデリー大学に入ることが学生の究極の目的でした。そこでは、インドで最も質の高い学問を授かることができて、一流の職が保証されていましたが、グローバリゼーションが進んだために、学生はニューデリー大学の学問水準がそれほどではないということに気付き始めました。インド政府や一流企業も同じです。彼らは、世界規模というスタンダードに基づいた優れた学生を求め、一挙に世界の一流大学と同じレベルの学問水準を要求しました。しかし、インドの経済や社会の現状を見ていただければ分かることおり、一日にして変革はなりません。不安の中で学生はややもすると夢や自信を見失いがちです。グローバリゼーションによつてもたらされる負の部分を看過することがあつてはならないと思います…」



プラハ城

---

## 評価はコインの表と裏

ハベル大統領は、病み上がりであつたにも係わらず、毎日いざれかのセッションに顔を出し、三日間の会議全体の流れや雰囲気を自ら把握していた。そのおかげで、出席者、マスコミや国民にも会議の重要性を大統領が自らアピールでき、今後の展開について大きな効果をもたらすことが予想された。

国際会議や財團助成のプログラムの評価はコインの表と裏と同じで、手法に決まつたものがない。前向きな評価を強調することもできるが、同時にネガティブな面を強調することも可能である。

以下は、そうした意味で指摘されたいくつかの代表例であり、必ずしも否定的であるといふわけではないのを留意頂きたい。

第一は、三日間にわたつて延々と会議を開催したため、出席者の緊張度や集中度が時に弛緩してしまつたことである。

第二に、会議の目的を明確にし議論を逸脱させないためのモデレーターと基調スピーカーに時間を配分しすぎた。そのため、出席者の大半が発言できる機会を与えられず欲求不満が高じるとともに、本人自身が会議の当事者であるという意識を希薄にしてしまつた。

第三は、世界のジャーナリストやマスコミの関心がオーガナイザーの期待値に比して低く、所期の目的を達成できなかつたことへの不満である。この点に関しては、私自身は極めて楽観的で不満も感じなかつたのだが、チエコやスロバキアを代表する委員は、とりわけ不満を持ったようである。

その背景には次のような理由が挙げられよう。まず、主催者がヒラリー・クリントンやキッシンジャー元米国務長官を基調スピーカーとして招待しマスコミ受けを狙つたわりには、効果がそれほどでなかつたという理由である。更に、旧ソ連から解放された東欧地域の特殊性から、自国の民主化への進展ぶりあるいは移行経済への取り組みぶりを、何としてもアメリカ、ヨーロッパに訴えたいという願望が含まれていたという理由である。

その他、女性の参加者が少な過ぎ、とりわけ宗教代表者に女性が含まれていなかつたという指摘は、私にとつては予想外の指摘で賛同するわけにもいかず、棄権せざるを得なかつた。

私は、第二回会議の終了時点で、まだ多くの委員の賛同を得るには至つていなかつたが、もつと別のところにある私自身が懸念する問題を指摘していた。

それは、第三回会議の結果がフォーラム二〇〇〇の成否を決定することになるという予感であった。なぜならば、フォーラム二〇〇〇はあくまでハヴエル大統領の思想を受け、彼のイニシアチブによつてスタートさせたものなのに、官僚あるいは学者を代表するグル

ープが大統領の意向を憶測し、それに基づき会議の方向を決めていくという官僚化の危険性が出てきたからだ。更に、健康状態を考えると彼が次期大統領に立候補する可能性はほとんどないと言つてよかつた。そうした場合、カリスマ性を誰がどう維持していくのかと、いう微妙な問題を、踏み込んで議論しようとしていなかつた。従つて、第三回会議で、私はハザエル大統領を再び前面に押し出すよう理事会で提案したのである。

最後は、解決方法が見つからないのだが、人間性の問題になる。ノーベル賞受賞者だろうと、ある国に恒久平和をもたらした卓越した政治家だろうと、次の百年、千年の地球や人類のあり方を真剣に考えようとする人物がほとんどいないということだつた。現実の中で功なり名を遂げ、現実の中でのみ威光が輝くことを知つている人たちには無理なテーマなのだ。草鞋を履き、世界の眞の思想家、哲学者、行動する人を探す作業が欠落していた。

### 真摯なコミットメントとファイードバック

今後、プログラム委員会を通じて意見交換を進めねばならないが、委員として、かつ日本財團というスponサーの立場を代弁して、考えるところを述べておきたい。

メディアは無論のこと傍聴した関係者を含め、第二回会議の成果を高く評価する点では意見が一致していた。ただ、それは第一回会議と比べての相対的評価である。私はこれを

間違いだと思つてゐる。少なくとも、ハヴエル大統領の意向を引き継ぐための手段としてのフォーラム二〇〇〇である限り、そのナイーブさをあくまでも大切にしなければならない。

第一回会議の成果があつてこそ、第二回会議がこうした結果に納まつたということである。従つて、第三回目は、第一回、第二回の会議を十分に踏まえたうえでなければ、成功はおぼつかないということである。恐らく、より困難な諸々の問題をプログラム委員会は解決しなければならないであろう。第一回、第二回の会議から第三回目へとつなぐ知恵はどう引き出すのかという点に関して、徹底した検証がなされるべきだ。過去に参加した出席者との密接な対話、フォーラム二〇〇〇への真摯なコミットメント、フィードバックをどう維持・発展させるのかが問題なのである。

ヨーロッパの合理主義、啓蒙主義が深く根を張つてゐることは、二回の会議でよく理解できた。しかし、アフリカ、アジアあるいは南米といった非西欧社会のプレゼンスをどう展開するのか、西歐的なるものと非西歐的なるものは単なる歴史の発展段階の差だけなのかということが十分に検証すらされていないのだ。英語という最も得意な語学を使つて相手とディベートすることすら満足に出来ない現状を、どう打開すればよいのだろうか。

五年にわたつて開催されるフォーラム二〇〇〇の思想の流れを系統立てて把握できる人物と、継続してコミットできる参加者を探す作業も第三回会議から必要になつてきていた。

功なり名を遂げた人ばかりが出席者では、過去の遺産を誇示するだけになりかねない。若い世代にどう引き継ぐのかという問題を討議するためにも、本会議の間に二回程度、ミニ・フォーラムを開催するシステムを充実させるべきであろう。

前年は、テスト・ケースとしてスチューデント・フォーラムを実施し、その中から際立った大学生六人を本会議に出席させたが、成果は如実に表れていたようと思われる。学生の斬新な意見は未熟であり理想主義に満ちたものになりがちだが、貧血の患者に輸血をしたときのように、出席者はほとばしる熱気を感じたはずだ。

グローバリゼーションはリージョナリゼーション、文化に対する民族主義をも鼓吹する。グローバリゼーションの進展においては、プラスの面ばかりでなく、負の部分も多く指摘されるようになってきた。異なる経済発展段階にある国々が、責め合い、競い合い刻々変貌する社会において、どういう切り口でこうした問題について議論を進めるのかも課題である。

細胞分裂で外胚葉と内胚葉が分化するように、バルカンはあくまでバルカンであり、アジアはあくまでアジアではないのかとさえ思われてならない。



## 将来の地球のあるべき姿—理想と帰結—

III 第二回会議

一九九九年十月十日～十三日

## 転機となる重要な会議

議題に関する限り、この会議がその後の流れを決めることになる。正確に言えば、グローバリゼーションに関する材料（問題、争点など）を仕込む段階が、ほぼ終わりに入つたのである。フォーラム二〇〇〇会議は三日間連続して開催するのを原則としているが、出席者のほとんどが途中で退場もせず、熱心に討議に参加するようになったのも大きな変化である。参加者一人ひとりの真剣な姿勢が、会議の伝統を築き上げていくうえで大きな信用力になり、必要とするどんな重要人物にもアプローチすることがより容易になったともいえよう。

日本のマスコミからよく聞かれる質問がある。例えば、ヒラリー・クリントンやキッシンジャー元米国務長官などの大物にどれほどの謝礼を払っているのか、もつと端的に言えば、彼らがどれほど膨大な謝礼金を要求してくるのかというものだ。マスコミの職業的本能に刺激された質問だから、一笑に付すわけにもいかない。

「いや、全く払っていません。ホテル滞在費と航空運賃、それもビジネスクラス料金だけです」と答えると誰もが驚く。それほど、日本が世界から有名人をカネで集めてきたという証拠でもあろう。

ある県の知事が、自分が国際人であることを県民に訴えたく、イギリスのマー・ガレット・サッチャー元首相を招待しシンポジウムを開催したことがある。謝礼金は総計で軽く一億円を超えたという。もちろん、口利きをしたブローカーが吹っかけた値段を鵜呑みにした結果ではあるが…。

キッシンジャー元米国務長官にも同じような話がまつわりついているが、二人が掛け値なしで会議への出席を快諾したことは、当事者である我々ですら初めは信じられなかつた。脇道にそれてしまつたが、是非はともかくとして、この会議が進展するであろうグローバリゼーションに焦点を当てるとは間違ひなかつた。それに対して、世界がどう対応しひじょうを打ち上げるかという今後の会議の展開は容易に予測できた。

初日は宗教、二日目は先進国ならびに移行期にある国家（この場合 旧ソ連から解放されたポーランド、ハンガリー、チエコなどの衛星国を示す）についての討議となつた。最終日は、世界人類すべてに共通するビジョンといった、悪く言えば雑駁、よく言えば極めてフレキシブルなアジェンダ設定となつた。

#### 学生の本格的参加

この会議から、学生が本格的に参入してきた。若い世代の意見を反映させるため、三カ

月前に開催されたスチュードント・フォーラムから五人ほどを選抜し、本会議に送り込んだのである。

この試みはスタートしたばかりだから、あまり性急な予測はしたくない。しかし、彼らが常に新しい人材をリクルートし新しい知恵や思想を投入し続けるならば、そして、官僚化というマンネリから自由であり続けるとしたら、名実ともに本体を越える日がやってくるに違いない。

スチュードント・フォーラムをスタートさせ、若い人の英知を反映させようという提言がなされたのは、第一回会議の直後であった。しかし、全体の反応は否定的であった。「造反こそ正義」と思いがちな学生ゆえ、やがて会議が彼らによって支配され深刻な対立が会場に持ち込まれでもしたら、パトロンである大統領に対してもしわけができるないというのが主な理由であった。だが、会議の結果から言えば、これは杞憂にすぎず、むしろ彼らの成長が楽しみとなってきた。

### グローバリゼーションを脅かす危険な流れ

会議では、グローバリゼーションを脅かす要素として、少なくとも二つの危険な流れが存在しているという認識が支配的だつた。



スチューデント・フォーラムのメンバーと笹川理事長

「開かれた社会」を標榜しながら、他方で世界の金融市场を一晩にして崩壊させるほどの投機を続けてきたジョージ・ソロスが、自らの行動の中に矛盾が存在することをこの会議で公式に認めたことも、フォーラム二〇〇〇が持つ独特の雰囲気が影響していたはずだ。

彼は開会のスピーチで、金融資本の勝手気ままで無秩序な投機行動を宗教のファンダメンタリズムと対比してみせ、世界を混乱に陥らせる大きな不安要因だと論破したのだつた。

それがあたらす結果は何か。貧富の差はますます拡大し、ごく一部の富裕国を除くと世界人口のほとんどが極貧化の道を歩むことになる。キヤピタリスト・ファンダメンタリズムと宗教的ファンダメンタリズムという二つの流れを統制しない限り、やがて世界は危機に直面するという予測は不気味でもある。

そのために何をすべきか。人類は既に明確な回答を見出している。少なくとも、現状を抜本的に改良すべき処方箋は出来上がっているというのが本会議に出席したものとの共通認識であろう。

例えば、国際的な不安要因となつていてるイスラエル・パレスチナ問題では、共通の聖地であるエルサレムを国連の共同統治下に置く案がある。しかし、いずれの当事者も空想的過ぎるとして一顧だにしない。

グロー、バリゼーションがもたらす危機についても同様である。金融資本の自由化を声高に標榜し遮二無二突き進む大国が、ややもすると敗者になりがちの他の意見には耳を傾

けようとしない。

宗教の融和という名のもとで、無数の国際会議が開催されている。出席する宗教指導者は、その場では世界共通の倫理観が存在し共存が可能と言いながら、血なまぐさい本家争いを止めようとしない。建前と本音がかくも違うこの現実に対処すべき行動が求められているのに、世界は動こうとさえしない。主権国家の本質を徹底して見直す勇気さえない。フォーラム二〇〇〇がこの問題に本腰を据えて取り組む日がいつか来るこことを期待したい。

#### スピーチの評価

三回の会議を終えたところで、スピーチ・コンテストの審査員になつたつもりで、個々のスピーチを評価させてもらうと以下のようになる。

まずは、西欧人が信奉してやまないロゴスの神様から探し出すと、その筆頭に間違いなく挙がつてくるのがヒラリー・クリントンであり、ハーバード大学のジェフリー・サックス教授である。この一人は基調演説ということもあり三十分近い時間を与えられたのだが、立て板に水とはこのことで、途中で言葉に詰まることも間投詞を入れることも全くなく、実際に見事なスピーチをやつてのけたのだった。周到な事前準備をしてきたことは間違いない

く、彼らは原稿に目を落とすことすらしなかつた。西欧が期待し育て上げるエリートとはかくなるものかと納得させられたのであつた。

それとは逆に、訥弁の雄はハヴエル大統領であろう。病気のために片肺ということもあるが、独り言を呟いているような話し方がかえつて聴衆の緊張を高め、知らずのうちに聴衆は話にのめり込んでいる。叱音のアダム・ミフニクもその点では同様であろう。

一方で、言葉がむしろ余計で、喋る必要もなく存在そのものがオーラを発していたのがダライ・ラマであった。彼のエスコート役には外交官試験に受かつたばかりの研修中の若い人、あるいは大学生を当てるにしていた。彼らはダライ・ラマに三回も会うと、それもホテルのロビーやプラハ城正面玄関での出迎えといつたちよつとした機会だけなのに、彼の心酔者になつてしまふのであつた。これをアジア的あるいは非西歐的価値観の力とでも言うのだろうか。専門家ではないので自信はないが、西欧の合理主義が非西歐的価値観を抑圧し辺境に追いやつてきた事実をもう少し強調する必要がありはしないかと、ダライ・ラマを見て思つた次第である。

IV

第四回会議

—2000年十月十五日～十八日



倫理、宗教、教育を通じてのグローバリゼーション達成の道

## より現実に即したテーマからアプローチ

三年も会議を継続すると、世論あるいはマスコミの反応も賛否両論が入り混じったものになる。当事者とすれば初志を貫徹したいのはやまやまだ。しかし、スポンサーあるいは自分の置かれている立場を考えると、信念は揺らがないものの一部調整あるいは妥協が可能であれば、体裁だけでも世間に合わせたくなるのは人情というものだろう。

「チエコ国民の血税を使つて、これほど贅沢な知的お遊びは止めにしたほうがよい」という声が外部からの最も厳しい批判であつた。しかし、これは誤解であつて、直接経費とう面に限つて言えば日本財団が最初から全額を負担している。従つて、それを言える資格があるのは、今のところ日本だけだと言えなくもない。

議題に関する批判については、傾聴に値する建設的なものが多かつた。とりわけ、過去に扱つてきた議題が余りに高踏的かつ抽象的過ぎるので、もう少し現実に即したテーマからアプローチして欲しいという意見には説得力があつた。

こうした意見を踏まえ、第四回会議の構成は「グローバリゼーション時代における教育、文化、科学、芸術、倫理・宗教それぞれの役割」という、まるで料理のレシピ本のようになつた。

発足当初から、会議には確固としたフォーマットが決められていた。それは、出席者の全員がプラハ入りを果たす日曜日の午後、プラハ城の中でも最大の規模を誇るヴァラティスラバ・ホールで開会式を行うことだ。ここには、チエコの上下両院議員を始め、七百人から八百人におよぶチエコの各界代表者が招待される。夏の観光シーズンにはホールの一部が観光客に開放されるので、馴染みのある人もいるはずだ。もともとは、国王臣下の騎士団や地方を治める諸侯、貴族が馬上のまま会場に乗りつけ、国王の拝謁を受ける晴れの場所であった。現在は馬ならぬ椅子が持ち込まれるので、かくも多くの出席者を招待することができる。

各宗教の代表者による合同礼拝に使用される聖ヴィータス教会、本会議場になるスパニッシュ・ホールとならび、プラハ城の数ある施設の中でも封建時代の王権を象徴する由緒ある場所である。

開会式の後、三日間にわたって本会議が開催されるわけだが、一つのセッションに半日を費やすので、合計五つのセッションが設けられることになる。議題を時系列で列記すると次のようになる。

- |              |                          |
|--------------|--------------------------|
| 第一回（十月十六日午前） | グローバリゼーションと教育・科学。その光と影   |
| 第二回（十六日午後）   | 先進国と途上国における教育・科学格差とその問題点 |
| 第三回（十七日午前）   | グローバリゼーションと宗教価値との共存      |

第四回（十七日午後）

地球市民時代における倫理、ならびに精神的基盤とは

第五回（十八日午前）

地球市民時代における文化・芸術の役割

各セッションとも活発で自由な議論を喚起すべく、少なくとも一人ないし二人のプロボカティブな基調スピーチから始めるのを常にしている。例えば、第一回のセッションではアンソニー・ギデンズ、午後のセッションはハッサン皇子と国連大学のハンス・ギンケル総長が受け持ち、二日目の第三回ではダライ・ラマとシエラレオネのヨセフ・ガンダ大司教、第四回はイスラエルのサイモン・ペレス外相と南アフリカのデ・クラーク前大統領といつた具合である。

ただ、ボリシーストマーカーあるいは学者にほぼ共通したことでもあるのだが、豊かな経験に裏付けされた信念あるいは確信からか、理論が先走りすることが難点であつた。チエコ国民が、フォーラム二〇〇〇に関して若干の不満を感じた要因もそこにある。

第四回会議も、大勢としてはその影響から完全に逃れることはできなかつたというのが当事者としての偽らざる気持ちであつた。

### 生き生きとした文化・芸術セッション

しかし、最終日の文化・芸術セッションはそうした懸念とは無縁であり、目から鱗が落



ピーター・ガブリエル（中央）とハサウェル大統領

ちるような新鮮かつ生き生きとしたものになつた。むしろ、今から振り返れば、ハヴエル大統領自身が代表的な文化人なのだから、冒頭にこのセッションを持つて来るべきではなかつたかと思う。

文化・芸術セッションが生き生きとしたものになつたのは、基調スピーチを受け持つたソインカの情感こもるスピーチのおかげだつた。

アフリカ大陸出身で初めてノーベル文学賞を受賞した人物だけに、人間性に裏付けされたスピーチをやつてみせたのである。彼に触発されたのであろうか、次に立つたピーター・ガブリエルが、ミュージシャンとしてグローバリゼーションをどう感じているかを、自分の感性に全幅の信頼をおいて語り始めたのだつた。そして、グローバリゼーションと文化との出会いは「鍋の底」を毎日見つめることから始まつたという言葉で彼は話をつないでいつた。その比喩はいまだに強烈な印象として残つている。

芸術家として名を成そうと辛酸を舐めつつ、血の出るような努力を続けていたティーンエーボー時代のことから彼は話を始めた。当時、既にビートルズが世界を熱狂の渦に巻き込んでいて、始まつたばかりの人工衛星によるテレビ中継でビートルズの曲を聞くと、たちまち釘付けになつたという。耳にした曲は、「All you need is love」であつた。

「愛が世界を結ぶ」と彼は単純かつ素直に思い込む。それは、希望に満ちた地球時代の到来を予測させるのに十分であり、最初のグローバリゼーションの洗礼であつた。そして、



ウォール・ソインカ（左）と李登輝前台湾総統

節約に次ぐ節約で三度の食事も自分たちで正面した貧乏な駆け出し時代の生活に思いを馳せる。彼はミルクを鍋で煮沸し、やがてそれがヨーグルト状になるまで鍋底をじつと見続けた。その変化 (transition) が、最初の文化との出会いであつたというのだ。

## ソインカの分析力

transition は、ガブリエルが好んで使う言葉だが、それがソインカになるとより分析的になる。異なる文化や宗教が出会うとき、そこには決まって抑圧、征服、混合、融和、併合など、あらゆる形の transformation が起こると前置きし、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ大陸で実際に起きた事例をアートや音楽に絞つて解説した。一例だが、ポルトガル人が誇るファド音楽は、その底に抑圧され奴隸化されたアフリカ人の郷愁、怒り、悲しみが込められているというが、それも煎じ詰めるとブラジル、セネガルあるいはナイジエリアに源流があるという。

こうした事例をふんだんに取り上げた後で、ソインカはエルサレムの聖地を訪ねたときの印象を語り始める。ナイジエリア出身の彼にとって、信じている宗教は異端と言で片付けられてしまうヨルバのオリサである。従つて、エルサレムを聖地とする三大宗教（彼が言う三大宗教とは、キリスト教、ユダヤ教ならびにイスラム教であり、仏教は含まれな

い) のいざれにも与しないがゆえに、自分にはエルサレムを語る資格があるとでも訴えていたかのようであつた。エルサレムが、良きにつけ悪しきにつけ、世界の文明の行方を支配してきた三大宗教発祥の地であることは誰もが知つてゐる。しかし、彼はそれを「世界三大宗教を生んだ母なる子宮」であり、いうなれば三つ子を生んだ世界人類共通の聖地である」と実に豊かな表現力で力説する。

その聖地が、ジハード、十字軍という名のもとに戦場と化して久しい。ユダヤ人とアラブ人が血みどろの戦いを、原理主義に凝り固まり、一切の妥協、話し合いさえ拒絶して行つてゐる。

「我々が長い歴史を通じて体験、学習してきた transformation はいつたいどうなつたのか」とソインカは問い合わせ、強引ともいえる結論を導く。

「こういう泥沼的状態に入つてしまつた以上、エルサレムを完全な国連統治下に置くしかない。それがグローバリゼーションへの確実な一步である」

知らずのうちに、私は第三回会議における言葉の魔術師サックスのスピーチを思い出していた。彼はまさにアメリカを代表する顔で、縦横無尽に統計数字をちりばめ言葉を駆使する。アメリカはそうした能弁なテクノクラートを自由自在に活用し、自国の正義を完璧無比なものとして世界に押し付けてゐるのだ。しかし、その言葉に真実や誠実さが加わると、ソインカのスピーチのように説得力を持つた言葉に変わるのでだ。

私は、彼のスピーチならびにそれと前後して行われたインドのカラ・シン前外相、ハッサン皇子のスピーチを近いうちに編集し、全人類の共存と平和のために世界に配信するところが当事者としての義務だと思っている。

東西冷戦後、アメリカは唯一の超大国になつた。そして、遮二無二グローバリゼーションを前面に出す傾向が強まつてゐる。それに対しても、物が言えるご意見番的立場に立つことがフォーラム二〇〇〇の趣旨に合致すると思うのだが、単純な反米主義に陥ることだけは何としても避けたい。

批判精神は、我が日本国に対してもある程度及ぶことになる。金を出すが口は出さないという対外的姿勢が戦後の日本の特徴になつてしまつたが、それは第四回会議にも当てはまる。ソインカやハッサン皇子に匹敵できるような日本人の論客を広く探しているものの、最後は語学のハンディがマイナスとなつてしまふ。これは、戦後教育の大きな問題点ではないだろうか。最後に、ソインカがスピーチの終わりに言つた言葉をそのままここに記して、第四回会議の総括としたい。

シャローム、サラーム・アレイクム、シャンティ…シャンティ…シャンティ…（注）

（注）ユダヤ教 イスラム教およびヒンドゥー教に特有の祈りの言葉。仏教なら念佛 キリスト教ならアーメンに相当する。



# グローバリゼーション時代における基本的人権

V

第五回会議 一〇〇一年十月十四日～十七日

---

## ハヴエル大統領と笹川理事長の信念

ハヴエル大統領と日本財團の笹川理事長がプラハ城で初めて会ったときの光景が、いまだに鮮明に記憶として残っている。大統領がフォーラム二〇〇〇の構想を笹川理事長に披露し、協力を公式に要請したときのことである。大統領は自分の在任中に、世界で指導的立場にいる有数の識者をプラハ城に招聘し、これから人類のあり方について千年単位で議論してみたいという夢のような企画を述べたのだった。

もちろん、それだけの壮大な構想を実現させたいと大統領が決断するに十分な理由や背景が存在していた。事実、その後五年間にわたって、フォーラム二〇〇〇は大統領が列挙した世界が直面する問題について、一つひとつ検証することになる。

ハヴエル大統領が会議の席で指摘したいくつかの懸念は、やがて現実化する。その代表的例が、アメリカを中心とする覇権国家の行き過ぎであり、グローバリゼーションがもたらす富の偏在と世界の二極化現象であった。

グローバリゼーションが避けて通れない現代社会の道であることには、誰も異論がない。だからこそ、負の部分のみを甘受することになる経済最貧国への配慮を決してないがしろにしてはならない。フォーラム二〇〇〇は、二〇〇〇年十月の第四回会議でこの問題をあ

えて取り上げ、世論を喚起している。それを受ける形で、最終回のテーマが「グローバリゼーション時代における基本的人権」に収束したのは、必然の成り行きだつた。

ややもすれば辺境に追いやられてきた非霸権国家がチエコである。しかし、こうした非霸権国家が沈黙を守りリーダーシップを發揮しないとなれば、現代世界はますます混迷の方向に進んでしまう。このような信念の持ち主であるハヴエル大統領ゆえに、「だからこそ、プラハでこうした会議を開催したい」と、声にも熱がこもるのだつた。

それを受ける笹川理事長の姿勢も信念に裏付けされていた。

「よく分かりました。しかし、大統領閣下の信念を実現するためには一年では難しいのではないかでしようか。『継続こそ力』とよく言われます。ここは無条件で大統領のお手伝いをさせて頂きたく、まずは五年間継続してみればどうでしようか」

こうして、フォーラム二〇〇〇は、中欧のプラハにおいて新たな伝統を作り上げるべくスタートを切つたのであつた。

五年間を振り返つてみると、フォーラム二〇〇〇がいつも歴史の半歩先を歩んでいたことがよく理解できる。第一回会議の年にあつたダイアナ妃の悲劇的事故死は、世界が全く新しいヒロインを求めていることを証明したばかりでなく、情報化の世界をも先取りしていた。第二回会議の年にはインテイファーダ闘争が再燃し、世界は来るべき将来に不安を感じた。そうした現実との連動は第五回会議でも例外ではなく、会議一ヶ月前にアメリカ

カの同時多発テロ事件が発生した。世界は未曾有の混乱に巻き込まれ、アメリカは「正義の御旗」を振りかざしてアフガニスタンへの全面戦争に突入する。まさにフォーラム二〇〇〇が懸念したとおり、テロが世界中に波及するとともにアメリカの覇権主義もまた暴走し、時代錯誤の十字軍が出現した。基本的人権も民主主義も、すべてアメリカの特許であり独占物であるという概念（ブッシュオロジー）が一人歩きを始めるのにも、さして時間がかからなかつた。

プラハではアメリカ大使館前の道路が封鎖され、チエコの軍隊が二十四時間の警戒に当たつた。ラジオ自由ヨーロッパ放送局があるビル前にも、四台の戦車が常駐する大騒ぎに発展する。

「アメリカに与しないものは敵」という踏絵を突き付けられ、フォーラム二〇〇〇事務局が会議開催に逡巡したのも事実である。世界各地で予定された国際会議は相次いでキャンセルないしは無期延長される状況下で、フォーラム二〇〇〇は万難を排して会議を開催すべきとの結論を出すに至る。出席者からキャンセルが出ることも覚悟のうえであつたが、「こういう時期だからこそ出席して積極的に発言するのが自分の役割だ」と言う人が多かつたのには勇気付けられた。

「出席する」と主張し続けたものの、「最後は命を保証できない」というインド政府の強力な反対により出国を断念したのはダライ・ラマであつた。逆に、「こうしたときだから



左からビル・クリントン前米大統領、ハヴェル大統領、エリー・ヴィーゼル

こそ、万難を排して会議に出席する」と言つてきたのはアメリカのクリントン前大統領で、国難に際してこうした決断をしてくるアメリカの底力を改めて思い知らされた。講演会や自叙伝の出版で大いに稼いでいるクリントン前米大統領が、この会議に限つて謝礼金なしで出席を快諾するという判断力の凄さ、勘の良さにも脱帽である。日本とアメリカの力の差はこうしたところから生じてくるのだろう。

ハベル大統領は、傑出したリーダーシップを發揮し続けた。開催の決断を世界がどう受けとめるか分からなかつたが、マスコミの反応は極めて好意的かつポジティブであつた。フィナンシャル・タイムズやフィガロを始めとする世界の一 流紙がこそつてフォーラム二〇〇〇を取り上げることになつた大きな要因である。五年目にして、ようやく「メジャーな国際会議」というイメージが定着したのである。

## ハッサン皇子の功績

会議の基本構想はあくまでハベル大統領自らの発想に端を発しているが、フォーラム二〇〇〇には彼の思想に賛同した多くの世界の指導者が基本構想委員として名を連ね、ハベル大統領を支えている。その代表的メンバーがヨルダンのハッサン皇子であり、アフリカ最初のノーベル文学賞受賞者のソインカ、アパルトヘイト撤廃に貢献しノーベル平和

賞を受賞した南アフリカのデ・クラーク前大統領等である。とりわけハッサン皇子は、王室特有の事情により国王になることを実兄の前国王から拒絶された悲劇の人物として話題になることが多いが、この件に関して本人は淡々としている。そして、中近東の安定と和平達成に邁進することが自分の使命であると悟りきっている。高邁かつ知性豊かな人物であるハッサン皇子とハヴエル大統領がプラハ城で会うたびに、親近感と相互理解を深めていったのも特筆に値する。

私は二人のメッセンジャー役を務め、プラハとアンマンを往復することが多かつた。その成果は、フォーラム二〇〇〇会議の一環としての中近東和平会議（ラウンド・テーブル）をプラハ城の一角にある大統領公邸で開催するという決定に結実する。

この会議には、イスラエルのペレス外相がわざわざ乗りこんで来たほどであった。インティファーダ以降、イスラエルとパレスチナの和平会議は暗礁に乗り上げ、双方が対話を機会さえ完全に失われていた。イギリスが仲介し、極秘裏に行われていた会議も自然流れとなっていた。こうした状況下で、双方が再び同じテーブルにつくことは想像を超えていた。フォーラム二〇〇〇会議に出席を決めたクリントン前米大統領が、この会議に強い関心を抱くのもまた当然のことで、彼を中心とした三者会談が、同じくプラハで真夜中に開催されたのも特筆すべき事件であつた。

ハッサン皇子は、プラハ・ラウンド・テーブルに出席する直前に、イスラム社会におけ

る基本的人権について特別声明を発表した。それは、九月十一日事件後におけるアメリカのイスラム教に対する過剰反応に強い懸念を表明したもので、今こそ冷静になつて英知を絞るべきだと世界中の識者に對して緊急にアピールをしたものだ。プラハ・ラウンド・テーブルに臨むハッサン皇子の決意が並々ならぬものであつたとの証明であると言つてもよいであろう。世界が今後いかなる方向に展開していくのか、ハッサン皇子の声明を仮訳だが本書の冒頭に掲げてある。

### プラハ・ラウンド・テーブルの成果

プラハ・ラウンド・テーブルの実質的成果は、当事者にとつてすら予測が困難であり、時間の経過がそれを証明するのを待つしかない。しかし、会議の概況について報告していくのも決して無駄ではあるまい。

この会議は、事前から周到な準備をしたうえで開催されたものではない。多くの偶然が重なり合つた結果として成り立つている。実務的な会議は、ハッサン皇子の主催により、中近東のプラハを目指すヨルダンの首都アンマンで二年間続けられた。

アンマンでは、生臭い和平問題を前面に出して話し合うのではなく、紛争中の中東で実際に生活するパレスチナ人あるいはイスラエル人当事者にとって、当面最も重要な問題を

探ることに焦点を当て、基本から和平を考え直すことになった。従つて、一昨年は中近東におけるNGOの役割を見直し、草の根による市民運動の重要性を再確認している。昨年は、紛争の原点にもなっている水資源に焦点を当てた。領土問題の本質を徹底して追究すると、結局は資源としての水問題、人権問題（パレスチナ難民）に帰着するというのが彼らの結論であつた。

こうして、双方の信頼を得ることにある程度成功した段階で、我々はようやく和平のための場を提供する機が熟したと判断し、アンマンでの会議にハヴエル大統領の出席とイニシアチブを要請したのであつた。しかし、彼は五年前に肺ガンの手術をしており、以来、季節の変わり目には決まって体調を崩し入退院を繰り返してきた。大統領自身は出席を快諾したものの直前になつて心臓の不調を訴え、再び長期療養を強いられてしまつた。医師団は、国外出張についてはヨーロッパ周辺国家のみに限るという厳しい制限を課した。

会場をプラハに移す以外方法がなかつた。幸いなことに、この時点でハッサン皇子が主催する和平会議は、ハヴエル大統領が主催するフォーラム二〇〇〇と密接に連携しているという認識が当事者の間で確立していた。こうして、この会議はフォーラム二〇〇〇と並行し、プラハ城内にある大統領公邸で開催される運びとなつた。

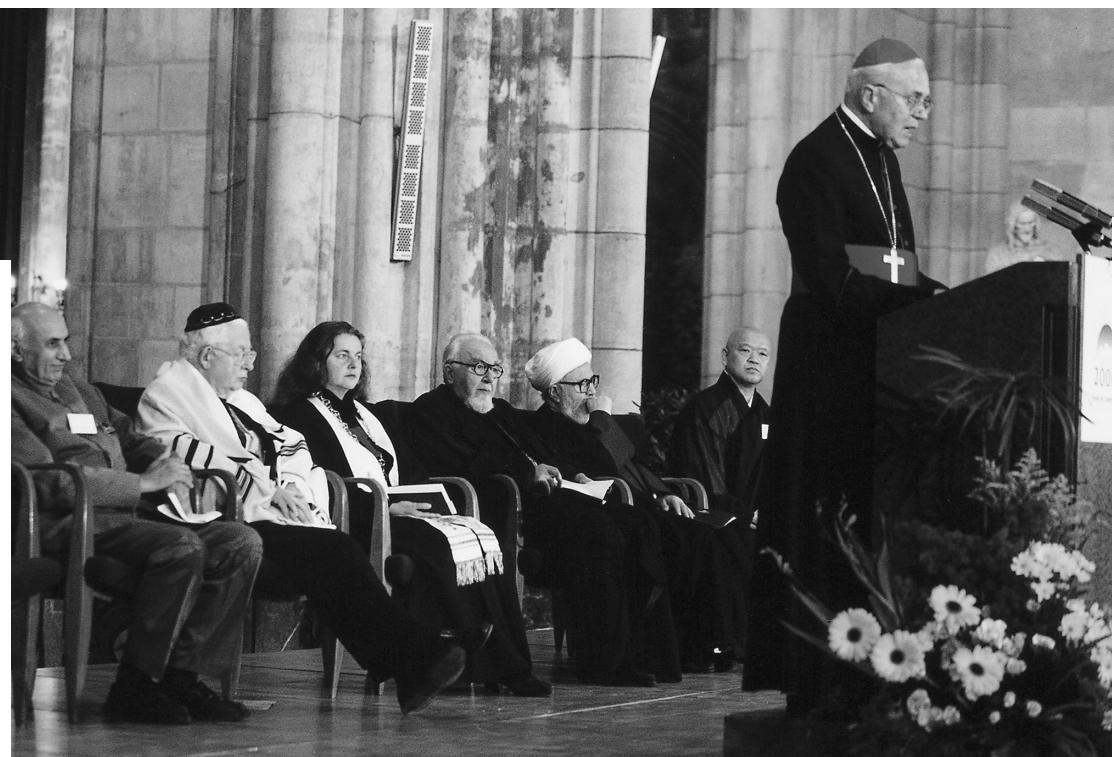
プラハ・ラウンド・テーブルは十月十六日に開催され、午前四時間、午後二時間、合計六時間のセッションとなつた。その間に、四時間にわたる昼食ブレイクが設けられた。

主な出席者はイスラエル側がペレス外相、キャンプ・デイビッド和平交渉のチーフ・ネゴシエイターのギリアード・シアード、パレスチナ側は国際問題アカデミー代表のマフディ・アブドゥル・ハディ、ベツレヘム大学のマヌエル・ハサッサン教授、その他第三者を代表して、南アフリカのデ・クラーク前大統領、ハヴエル大統領、カール・シュワルツエンバーグ旧オーストリア・ハンガリー帝国皇子、ハッサン皇子、英國王立国際問題研究所のローズマリー・ホリス中近東部長などが出席した。

### 際どいジョークが雰囲気を和ませる

相互の溝は深く、それゆえ不信、憎悪も想像を超えていた。しかし、和平を達成しない限り地域に安定はない。それは、言い知れない絶望感を抱かせるが、だからこそ和平しか道はないという開き直りにもつながる。従つて、問題の本質が、仲介役を買って出る大国の利害を中心とした国際政治の奇々怪々さにあつたとしても、非覇権国家として定評のあるヨルダンやチエコの活動できる余地があるようと思われたのである。

午前中の会議は、まさに不信感のぶつかり合いで、実質的な討議はなされなかつたと言つてよいだろう。しかし、昼食をはさんだ非公式の会話が、午後の会議の流れを変える決定的な役割を果たすことになる。それも、ちょっとした雑談が契機となつた。イスラエル



各宗教界からの出席者による合同礼拝

代表が早稲田大学に留学していたと言い出したのがきつかけであつた。しばし話題は日本に集中し、そのリラックスした雰囲気を見て、パレスチナ代表が途中から会話を加わつてきたのである。

午前中の会議が緊張したこともあり、誰彼となくハツサン皇子が会議中に吸い続けてきた葉巻にあやかりたいということになつた。葉巻好きの皇子がいつもシガーケースにかなりの葉巻を入れ持ち歩いているのを何度も目撃していた私は、「誰が最初に葉巻をおねだりするのかが問題だ。なぜなら、まずは頭を下げなくてはいけないのだから」と言つてイスラエル代表をそそのかした。

得意満面で彼が戻つて来たのは言うまでもない。次に我々が直面した問題は、マッチを探すことであつた。百戦錬磨のネゴシエイターも趣向の問題になると素朴に行動するらしく、マッチまで思い付かなかつたらしい。今度はパレスチナ代表がハツサン皇子のところに走つた。葉巻に火をつける段階になつて、私はより踏み込んでさらにきつい冗談を言つた。際どいジョークであつた。

「お互い火をつけるのは、こんなときだけに限りたいものだね」

英語でigniteという言葉をあえて使つた。自動車のイグニッショングから連想してもらうと分かりやすい。一瞬、弾けるような笑いが会場に広がつた。一人はきついジョークをすぐ理解したのだつた。

午後のセッションは予想外の展開となり、最後まで内容について紛糾し続けたプレスリースを記者団に向けて発表することに双方が同意したのである。

こうした状況を見ると、プラハ・ラウンド・テーブルが今後も継続されるのであれば、日本としても政府の公式代表を派遣することを考えてもよい時期ではないだろうかと思う。

### 同時多発テロから人権問題を問い合わせ直す

第五回会議の中心課題を人権問題とすることは、第四回会議の終了直後に決定されており、九月十一日のテロとは一切関係がない。しかし、不幸な事件によつて、かえつてテーマの緊急性と重要性が認識され、世界のマスコミがフォーラム二〇〇〇により注目するところになつたのは、不幸中の幸いである。

第五回会議の特徴は、参加者が例外なくテロ事件について触れ、そこから人権問題を問いか直していることだろう。会場全体は、このテロ事件で世界のパラダイムが全く変つてしまい、二十一世紀も二十世紀と同様に血塗られたものとなるのではという暗い未来を予測させるスタートを切つたという絶望感に支配されていた。

初日は、基本的人権とは何か、また何が問題なのか、その根源的原因と重要さを見直す

ことに費やされた。

主なスピーカーは、アウシュュビツツの生き残りでありノーベル平和賞受賞者のヴィーゼル、ベストセラー『歴史の終わり』の著者であり政治学者のフラン시스・フクヤマ、クリントン前米大統領、キューバのディシデントでありながらカストロ首相があえて出国を認めたエリザルド・サンチエス・サンタ・クルスなどであつた。

スピーカーの中には、開かれた社会と民主主義、情報の公開とグローバリゼーションが基本的人権にとつて欠かせないことを強調する一方で、西欧文明が全体主義を生み出す土壤であることを指摘する向きもあつた。

クリントン前米大統領はテロ事件に触れ、テロリストが抱く真実・命・社会觀は自分たち西欧諸国が描くそれとは全く異質なものであると強調し、環境の悪化、貧困、新しい疫病の蔓延と同様に、テロが二十一世紀の人類にとつて最も脅威を与えるものの一つであると断定したのであつた。

午後には笹川理事長の提案で、女性から見た人権問題と社会から抹殺されてきたハンセン病患者の視点から見た人権問題を問い合わせセッションが特別に設けられた。

ハンセン病撲滅に関して積極的に取り組んできた日本財團だけに、この分野の専門家を広く動員することに成功し、医療、病気という観点から全く新しい基本的人権問題を提起したことは画期的な試みといえる。それは、女性の地位を向上させるというアジェンダと

も共通している。

二日目は、人権に関する国際機関の取り組みがあらゆる角度から再検討された。グリーンピース・インターナショナルの議長であるアン・サマーズは、環境と人権が切っても切れない関係にあり、NGOがこの分野に関する行動に出ることが最も重要であると強調した。

他方、インドの実践的環境保護運動家であるヴァンダナ・シバは、経済のグローバリゼーションは政治におけるタリバーナザーシヨン（原理主義）とさして変らず、多様性こそ平和の道であると主張した。最後に、最も深刻な対立的関係にあるイスラエル、アラブ双方を代表して、イスラエルのペレス外相とヨルダンのハッサン皇子が壇上に登り、宗教と暴力は関係がないことを訴えたのが印象的であった。

最終日は、「国家主権と人権」という極めてセンシティブな問題に焦点が当てられた。こうなると、アムネスティ・インターナショナルや国際ペン会議が人権問題に関する国際会議を開催したと思われても不思議でないほど、時に感情が先走り、剥き出しになる。説得力を持つて対応できる人物は、実際に「国家主権と人権」という問題に直面したものでなければ難しいだけに、主觀と客観への距離の置き方が重要なになってくる。このセッションは、まさにその典型的モデルとなつた。

東ティモール独立運動を率いノーベル平和賞に輝いたホセ・ラモタ、長い間投獄された

経験を持つ台湾のペン・ミン大統領顧問、アルバニアの活動家のベトン・サロイ、ベラルーシの民主主義運動家のビンツウツク・ヴィアツォルカなどが次々に登壇し、スピーチを行つた。彼らの歴々とした過去の行動からして、人権が国家主権に優先するという結論が出るのも当然のことである。その後、スチューデント・フォーラム代表が続いたが、その場の雰囲気に圧倒されてしまったのだろうか、自分たちの感情を抑えきれず演説の途中で号泣し、会場がセンセーション的な雰囲気になつてしまふハプニングもあつた。

ここで、フォーラム二〇〇〇の将来について若干付記しておきたい。二日目に、大統領公邸がある王宮公園ライオンコートの一隅にあるレストランで、大統領と笹川理事長だけの個別昼食会が開催された。五年間にわたつて支援してくれた笹川理事長へのお礼が主な目的だったが、会食は意外な展開をみせ、どちらからともなく将来への展望について話が飛躍したのであつた。笹川理事長は、それを検討する条件として、五年間の実績を第三者に委託して客観的に評価しておくこと（エバリュエーション報告として結実）、今までの成果を出版物などの形できちんと残すこと、会議終了後、できれば The Prague Declaration（巻末を参照して頂きたい。The Prague Declarationは、国連の公式文書としてその後追認された）等の形で主張を世界に明確に打ち出して欲しいこと、これらが実現できるのであれば新たな展開の構想を打ち出すのもやぶさかではないと明言、即答した。

大統領もそれを受け、この五年間、性急な結論を捜し求めてこなかつたことが会議の成功をもたらしたのであるが、今後はもつと現実の社会に目を向け、具体的提言を訴えていく必要性を感じていると笹川理事長に積極的に応えた。

その後の事務局の慌ただしい動きを、わざわざここで説明する必要もあるまい。

こうして、新たな取り組みが財団組織の改組を含め進行中であり、近日中には議題、アジェンダを含め詳細を公表できるものと信じている。

## 終わりに

### —フォーラム—〇〇〇新 機構発足を前にして—

二十一世紀に入つてからの中欧の動きが面白い。いずれの国もかつてソ連共産党的支配下にあつた国々である。西欧がそれらの国をどう見ていて、対象国がどう反応しているか、端的に言つてしまえば、西欧がどこまで東進し、どの国をEUのフル・メンバーとして受け入れようとしているのか、外部の関心はそこに尽きる。EUは経済統合、通貨統合、そして最後は政治統合へと段階を追つて統合を進めているが、究極の目的はなんといつてもアメリカに匹敵できる単一国家の実現である。従つて、民族、宗教あるいは文化的統合も必然であり、公にはしていないが、それらの条件も加入のための前提条件に入つているはずだ。

そうであれば、非西欧社会の日本から見ても、ある程度は将来の予測が可能だ。ウクライナ、旧ユーゴ、あるいはトルコといった国の名前を具体的にEUにぶつけてみれば即回答が出てくる。究極のシナリオとしては、ロシアがEU加盟を申請することだ。これによつて、EUが長年にわたつて検討しコンセンサスを打ち立ててきたすべての内部基準、EUの目指すところが一挙に明確になる。そうなれば、アメリカのEUに対する距離感や考え方も自ずと明らかになろう。

こうした長期見通しはさておき、近未来の中欧にどんな事態が起きるのだろうか。EUから優等生と見られているのがビシエグラード諸国、すなわちボーランド、チエコ、スロバキアそしてハンガリーであり、それにバルカン国家の優等生スロベニアが加わる。旧ユ

一ゴ時代から西欧化が進んでいたスロベニアは論外として（もちろん加盟に伴うプラス・マイナスはいろいろあり、国内での論争も喧しい）、彼らはEU加盟に対していかなる姿勢をとっているのだろうか。

一言で言えば、それはファン心理に等しい。ひたすらアイドルであるEUの関心を引きつけることに専念し、そちらにしか顔が向いていない状態なのである。ただ、実現の可能性が高まるにつれ、この四カ国内の利害を巡る思惑も錯綜し、仲間内で意見の食い違いが目立ち始めている。

二〇〇一年の元旦に共通通貨ユーロが発足し新紙幣が発行されたが、そのいずれにも橋と窓のデザインが印刷されている。国と国をつなぐ象徴としての橋、広く門戸を開放し、資本と人の移動が自由になつたことを象徴する（外に開かれた）窓という意味である。実はこのデザインを請け負つたのがチエコ人で、その意味からビシェグラード諸国のEUへの想いは、通貨を通じて一足先に実現されたといってよい。コソボ戦争時、NATOはアメリカ追随し全面介入に踏み切つたが、このときの四カ国の動きもまた興味深い。スロバキアはアメリカが要求する以上の協力を申し出て、軍事基地を自ら提供したのだった。アイドルに熱狂し、物を貢ぐファン心理以外のなにものでもない。しかし、こうした関係がいつたん出来上がつてしまつと、後は既成事実が先行し一瀉千里となる。双方がお互いに利用しあい、協力関係も雪だるま式に加速されていく。

ハヴエル大統領の思想実現に協力してきたフォーラム二〇〇〇も、こうしたファイーバーの余波を受けるのは免れ得ない。当初の約束だった五年が終わるやいなや、EUがいついに熱い視線をフォーラム二〇〇〇に注ぎ始めたのだつた。過去五年間にわたつて積み上げてきた実績は、人材のネットワークからオピニオン・リーダーとしてのマスコミへの影響力まで推し量れないほど大きい。この実績を隙あらばタダで掌中に収めようとする輩が出てくるのもまた必然であろう。

三月、フォーラム二〇〇〇のフォロー・アップのため私はプラハに戻つた。第五回会議の終了から六ヶ月が経つていた。そして、滞在一週間も経たないうちに、今後の展開についてのあらゆる企画が、ハヴエル大統領のもとに届いていることを知つた。全てをここで挙げる必要もないが、現在進行中のある企画について説明するだけでも、EUとチエコの将来への思惑がいかに一致しているか分かる。

ただ、その話を始める前に、誤解を避けるためにも私自身の意見を明らかにしておきたい。フォーラム二〇〇〇の立ち上げに当初から係わってきたこともあり、この企画については人一倍の愛着を持つてゐることは否定しない。だからといって、成果や評価をすべて日本に還元すべきとは思つていらない。必要なならば、日本のどこかの組織がそれに気付いて動くはずである。逆に必要性を認めないと、反応はない。国際関係とはそういうものだ。単に善悪で動くことはない。日本はこの性向が強く、戦後の日本外交が対米追随以外のな

にものでもないことは誰もが認める事実である。連日報道される外務省の不祥事が見事なまでにそれを物語っている。特權を振り回し、プライドと派閥争いに明け暮れる世襲であるかのような二世、三世の官僚に、いつたいどんなことが期待できるというのだろう。それに迎合、あるいは黙認してきた国民や政治家も同じ穴のムジナではあるが…。

これに対する答えは簡単だ。平和を希求する日本人の使命として、人類の将来に関し明るい展望を切り開く可能性があるものに対しても積極的に対処していくのである。

現在進行中の企画とは中近東和平会議である。かつてハヴエル大統領がこの地域の和平に関して仲介の労をとろうとしたことがある。しかし、エキスパートが少なく実績もなかつたことから暗礁に乗り上げ、中断したままになっていた。

企画が再び動き出したのはフォーラム二〇〇〇が契機だった。ヨルダンのハッサン皇子、イスラエルのペレス外相の同会議への出席が、その機会を再び開いた。フォーラム二〇〇〇を主催してきたチエコならびに日本の関係者はチャンスを見逃さなかつた。ハッサン皇子に対しては、自からのイニシアチブによる和平会議の開催を促す一方、ハヴエル大統領に対しても中欧での経験を生かし、もう一度この分野での仲介に乗り出すべく訴えたのであつた。仲介が縁となつて、中東和平について考える会議がフォーラム二〇〇〇の一事業としてプラハ城で開催されたことは既に述べた。これは、ハヴエル大統領とハッサン皇子がフォーラム二〇〇〇会議を通じて極めて親密な友情、信頼関係を築いた結果だつた。

ところが、和平会議は六ヶ月の間に大きく変貌していたのだつた。私がプラハに戻つた三月にはＥＵが全面的に関与していて、イギリス外務省が本格的な支援態勢に入つていた。更に、中近東専門家をチェコの大統領府に派遣さえしていた。私はその老練な外交手腕に舌を巻くと同時に脱帽した。彼らはチェコの外務省、大統領府とも太いパイプを維持し、フォーラム二〇〇〇の動向を終始注視してきたのだつた。少し冷静になつて考えれば、これは必然の結果だつた。

しかし、タイミングが早過ぎるような気がした。会議はまだ何も成果をあげていなかつたし、雰囲気づくりの段階にすぎなかつたのである。最も気になつたのは、この時点でＮＧＯの行動に自ずと制約が加わつてくることだつた。どこかの段階で影響力がある国が関与してくるのは当然で、介入なくして実際の進展が望めないこともよく承知していたが、ＮＧＯにしかできないことを実行しようとしている時点で大国のイギリスが介入してくるのは、余りに急な動きであつた。

チエコ政府の役人がすべてハヴエル大統領支持派であるわけもない。ＥＵ加盟に対するチエコ国民の熱意の表れとして、事業を土産物にしようとする役人や学者がいても少しも不思議ではない。フォーラム二〇〇〇の関係者にも同じような考え方を持つ人が少なくなかつた。時が経ち評価が高まるにつれ、フォーラム二〇〇〇をそうした目で捉えるインテリが徐々に影響力を持ち出した。やがて、共産党支配下の時代や動乱時に西欧に亡命した多

くのチエコの知識人が総動員され、EUとチエコを結ぶフォーラム二〇〇〇を武器として使い始めたのだつた。

彼らはチエコ国民にEU加盟の利点を説くだけでなく、国内の有能な将来の人材を発掘する場として活用し、チエコがEUに加入するための大きな車輪の一つに成長させたのだつた。

これは嬉しい誤算であつた。しかし、やがてとんでもない情報が耳に入つて來た。EUとチエコの一部指導者が中近東和平會議に対しては日本とヨルダンの参加を望んでいないというのである。まさかと耳を疑つたが、調査を進めるうちにこれが事実であることを否定するのが難しくなつた。「日本に関するでは今更何を言つても無駄である。極東の成金國家である日本は金をばら撒くしか能がない。しかも中近東では全く実績がない」というのが彼らの主張であつた。一方で、ハツサン皇子に関しても、驚くべきかつ失望させるような判断がなされていた。彼のカリスマ性、インテリ振り、発言能力と影響力がEUにとつて好ましくなく、一家言を持つ彼の発言によつて、会議の動向が支配されたたくないというのであつた。

これこそまさに西欧、とりわけアメリカの外交思想そのものではないか。世界に覇權を訴え、自分の思惑通りに国際會議を仕切る。上手く運ばないとときは脱退する。中近東和平會議に関する決定権はアメリカ、そしてそれに追随するイギリスにしかないと言つてゐるのと

同じであつた。戦後の国際政治の本質を見る思いであつた。

現実の世界は確かにそのとおりである。しかし、フォーラム二〇〇〇に関して言えば、日本のNGOがやるべきことはまだたくさん残つてゐるはずだ。私はそれらを実行してから政府間交渉に移しても遅くないと訴え続けた。二日間にわたつてロンドンの外務省で開かれた会議に私は他のフォーラム二〇〇〇の同僚とともに、ようやくにして出席することができたのは言うまでもない。しかし、一時が万事、西欧の事情は奇々怪々にして、我々の想像を超えることが依然として続いている。

しかし、何よりも日本人の平和への強い意思と国際貢献への行動・実践を世界に理解してもらうために、このたび、フォーラム二〇〇〇が装いを新たに、笹川平和財団の支援を受けて継続することになつたことは喜ばしいことである。

(注) フォーラム二〇〇〇に関する参加者の個別発言、関連スピーチ等に関しては、<http://www.forum2000.cz> を参照して頂きたい。



**Martin Jan Stránský** - See page 29.

**Anne Summers** - Board Chair of Greenpeace International, prominent Australian feminist, writer and journalist, long time political activist, particularly in the field of women's rights. Chief advisor for women's issues to former Australian Prime Minister Paul Keating.

**Veton Surroi** - See page 34.

**Vincuk Viacorka** - Leading opposition politician in Belarus; Chairman of the Belarussian Popular Front. Often persecuted for his political beliefs by Lukashenko's regime.

**Antje Vollmer** - See page 29.

**Richard Von Weizsäcker** - See page 19.

**Elie Wiesel** - See page 20.

**Marion Wiesel** - See page 29.

**Grigory Alekseevich Yavlinsky** - Russian economist and politician, member of the Russian State Duma and a former presidential candidate. Co-founder and chairman of the Yabloko Party and Chairman of the Board of the Center for Economic and Political Research, a private, non-governmental research institution based in Moscow.

**Min Zin** - Burmese pro-democracy student activist, currently working as programmer and commentator for Radio Free Asia (RFA) and the Irrawaddy Magazine as culture page editor.

**Shimon Peres** - See page 17.

**Tomáš Pojar** - Director of the People In Need Foundation (PINF), organization operating in the field of humanitarian aid and human rights. He worked in Israel and the United States, later in Croatian refugee camps. In the past he also acted as the PINF coordinator for the region of the former Soviet Union.

**José Rámos Horta** - See page 17.

**Kelly Cristine Ribeiro** - Students' Forum 2000 delegate from Brazil. Working in the field of non-formal education, mainly in the areas of social management and sustainable development.

**Jacques Rupnik** - See page 18.

**Elizardo Sánchez Santa Cruz** - Cuban dissident, Chairman of the Executive Board of the Cuban Committee for Human Rights and National Reconciliation.

**Yohei Sasakawa** - See page 18.

**John Shattuck** - Former U.S. Ambassador to the Czech Republic, a former Vice President of Harvard University and Assistant U.S. Secretary of State under President Clinton. Recently appointed CEO of the Kennedy Library Foundation.

**Vandana Shiva** - Writer, internationally renowned environmentalist and feminist, director of the Research Foundation for Science, Technology and Natural Resource Policy in Delhi. Her current work focuses on biodiversity and sustainable agriculture. She is a board member of the International Forum on Globalization and the Third World Network.

of the UN Secretary-General and as the Head of the UN Interim Administration Mission in Kosovo. Currently Minister of Health of France.

**Sergei Kovalyov** - See page 16.

**Meena Krishnamoorthy** - Students' Forum 2000 delegate from Australia. Active in many social movements, notably refugee rights, women's rights, environment, and indigenous rights, including Sydney University Amnesty International.

**Martin Kryl** - Students' Forum 2000 delegate from the Czech Republic. Involved with the Czech National Committee of United World Colleges, Amnesty International and several local youth groups.

**Anwei Law** - Founder of Hansen's Disease Association based in the United States. One of the world's major experts on leprosy.

**Adam Michnik** - See page 23.

**Peng Ming-Min** - Renowned political scientist and former dissident who has made significant and lasting contribution to the democratisation of Taiwan. DPP (the current ruling party) candidate for presidency of Taiwan's first direct presidential election (1996). Currently, a Senior Advisor to the President of ROC on Taiwan.

**H.E. Sheikh Abbas Mohajerani** - See page 32.

**Jelena Panza** - Students' Forum 2000 delegate originally from former Yugoslavia, grew up in Austria. Currently finishing her studies at New York University where she's majoring both in modern European history and French literature.

**Jiří Pehe** - See page 28.

ern Europe's most pervasive secret police network, which collected and maintained information on more than one third of the population of the former German Democratic Republic.

**Teofisto T. Guingona** - Vice-President and Secretary of the Department of Foreign Affairs of the Philippines, professor of law, businessman, legislator and author.

**Árpád Göncz** - Former president of the Republic of Hungary.

**Tomáš Halík** - See page 22.

**H.R.H El Hassan bin Talal** - See page 15.

**Václav Havel** - See page 15.

**Hazel Henderson** - See page 15.

**Noerine Kaleeba** - Ugandan-born AIDS activist and the UNAIDS Programme Development Advisor.

**Dani Karavan** - An Israeli sculptor. Throughout his career he produced large-scale public works, designed to relate to their climate and landscape, as well as to the wider social environment and human rights.

**Kenzo Kiikuni** - Professor of public health at the Tokyo Women's Medical University and Board Chair of Sasakawa Memorial Health Foundation, which is aimed to cooperate for the improvement of global health, with a special emphasis in the field of leprosy control.

**Bernard Kouchner** - Founder, Organizer and President of Medecins sans Frontières. During 1999–2001 Mr. Kouchner acted as a Special Representative

**Edith Awino** - Students' Forum 2000 delegate from Kenya, undergraduate student of Political science at the University of Nairobi. Actively involved in the field of social change with organizations such as Kenya Female Advisory Organization and Amani Peoples Theatre.

**Akin Birdal** - Former president of the Human Rights Association of Turkey and a renowned human rights defender.

**Shunling Chen** - Students' Forum 2000 delegate from Taiwan, member of the Association For Taiwan Indigenous People's Policies.

**Bill Clinton** - 42nd President of the United States. Clinton's two terms in office were marked by efforts to create or expand domestic social programs and by attempts to resolve several major crises overseas. He was instrumental in facilitating the tentative peace accord between the PLO and Israel in 1993.

**Frederik Willem De Klerk** - See page 14.

**Waris Dirie** - Somali-born activist and fashion supermodel; Special Ambassador for the Elimination of Female Genital Mutilation for the United Nations Population Fund (UNFPA).

**Albert Friedlander** - See page 21.

**Francis Fukuyama** - American writer and political scientist, author of the bestseller "The End of History and the Last Man (1992)." He is currently Professor of International Political Economy at John Hopkins University.

**Jostein Gaarder** - See page 31.

**Joachim Gauck** - Former Federal Commissioner for the Stasi Files from 1990 until 2000. The Stasi Files is a federal agency responsible for the files of East-

**Mário Soares** - Socialist politician and lawyer, who became President of Portugal in 1986 as the country's first elected civilian head of state in 60 years.

**Wole Soyinka** - See page 19.

**Martin Jan Stránský** - See page 29.

**Hanna Suchocka** - See page 24.

**Veton Surroi** - Albanian writer; Editor-in-Chief of the major newspaper in Kosovo, the “Koha Ditore Daily.”

**Miklós Sükösd** - See page 25.

**Gavan Titley** - See page 29.

**Dubravka Ugrešić** - Croatian writer; known for her books such as “Fording the Stream of Consciousness.”

**Lukáš Výlupek** - Students’ Forum 2000 delegate from the Czech Republic.

**Lord Arthur Gerge Weidenfeld** - See page 25.

V 2001.10.14–10.17

**H.E. Sheikh Mohammed Mohammed Ali** - Islamic scholar, researcher and politician. Human rights and political activist in Iraqi opposition. Founder and member of Iraqi National Congress Leadership Council based in London.

**Timothy Garton Ash** - See page 13.

**Jiří Musil** - See page 24.

**Colm O'Cinneide** - Students' Forum 2000 delegate from Ireland. A Law graduate and qualified barrister. Has studied at University College Cork, Ireland and at the University of Edinburgh. Currently working as a legal policy advisor in the British Parliament, specialising in the fields of international human rights, civil liberties and anti-discrimination law.

**Shimon Peres** - See page 17.

**Mariano Plotkin** - Director of New York University in Buenos Aires. He has published several books on globalisation and its impact on Latin America. He organises international conferences on globalisation and culture in Buenos Aires.

**Martin Porubjak** - Theatre director, politician, literary adviser; presently a literary advisor of the Slovak National Theatre; President of the ITI (International Theatre Institute) in Slovakia.

**Jacques Rupnik** - See page 18.

**Yohei Sasakawa** - See page 18.

**Peter Scott** - Vice Chancellor at Kingston University in the United Kingdom; has worked as a Director of the Centre for Policy Studies in Education; an editor, writer, reporter and professor in the field of education.

**Takashi Shiraishi** - Professor of Kyoto University, Centre for Southeast Asian Studies. Taught at University of Tokyo and Cornell University from 1979 to 1997. Written books, including three award-winning books on Asia.

**Karan Singh** - See page 24.

**Takeaki Hori** - See page 15.

**Mihoko Ito** - Students' Forum 2000 delegate from Japan. Currently a graduate student at the Monterey Institute of International Studies in California, USA where completing Master of Public Administration in International Management.

**Asma Jahangir** - Human rights lawyer, Chair of the Human Rights Commission of Pakistan. Member of the Women's Action Forum.

**Josef Jařab** - See page 27.

**Yousif al-Khoei** - Director of Al-Khoei foundation based in London, which is an international Islamic charitable institute. It was established under the patronage of his grandfather, His Holiness Grand Ayatullah al-Khoei.

**Ivan Klíma** - Czech writer and novelist, famous for books such as "Spirit of Prague", "Love and Garbage" or "My Golden Trade"; participated in the 1968 Prague Spring.

**Serguey Kovalyov** - See page 16.

**Lee Teng-Hui** - Former president of Taiwan, political leader who succeeded in developing Taiwan's democracy.

**Manfred Max-Neef** - Rector of Universidad Austral de Chile. He worked at development projects in Latin America.

**H.E. Sheikh Abbas Mohajerani** - Leading Iranian-born Islamic scholar, thinker and writer. For the last 40 years he has been a strong advocate of inter-faith dialogue.

Rosario National University, Argentina. Youth Co-ordinator at Educating Cities Latin American Delegation.

**Albert Friedlander** - See page 21.

**Jostein Gaarder** - Author of the best sellers “Sophie’s World” and “The Solitaire Mystery” for which he has been honoured with several international awards.

**Ivan Gabal** - See page 22.

**Peter Gabriel** - World renowned singer and propagator of ethnic music; founded the organisation WOMAD (World of Music, Arts and Dance), with a first music festival in 1982; is currently co-operating with Amnesty International in the field of Human Rights.

**Joseph Ganda** - Archbishop of Freetown and Bo in Sierra Leone, contributed greatly to the fight against the ethnic violence in this country.

**Anthony Giddens** - Renowned sociologist; since 1996, he has been the Director of the London School of Economics.

**Hans Van Ginkel** - Rector of the United Nations University in Tokyo; former rector of Utrecht University; President of IAU; he has published widely in the field of geography and has also written a number of articles on internationalisation and university management as well as science policy.

**Tomáš Halík** - See page 22.

**H.R.H. El Hassan bin Talal** - See page 15.

**Hazel Henderson** - See page 15.

IV 2000.10.15–10.18

**Tariq Jawaid Alam** - Students' Forum 2000 delegate from Pakistan. 20 years old student of medicine at Dow Medical College. Senior vice-president Galaxy Youth Organisation, associated with the International Youth Parliament.

**Mark Azzopardi** - Students' Forum 2000 delegate from Malta. Third year Mechanical Engineering at the University of Malta. He is actively involved in many students organisations, such as National Student Travel Foundation, Maltese Christian Democrat Students and others.

**Andris Barblan** - Historian and political scientist. Presently the Secretary General of CRE, the Association of European Universities. Previously worked for Geneva-based international organisations, such as the World Council of Churches or the European Centre for Culture.

**Josep Bricall** - Former President of the Association of European Universities; key actor in the reform of the Spanish education program of the European Union.

**Fritjof Capra** - See page 13.

**H.H. The Dalai Lama** - See page 14.

**Frederik Willem De Klerk** - See page 14.

**Thomas A. Dine** - Has worked for the U.S. Agency for International Development (US AID). President of the Radio Free Europe.

**Maria Celina Del Felice** - Students' Forum 2000 delegate from Argentina. 24 years old Bachelor of International Studies at the Lester B. Pearson United World College of the Pacific, Canada. Presently Political Science Student at

Helsinki Monitor, coordinating the Roma Office.

**Jacques Rupnik** - See page 18.

**Jeffrey D. Sachs** - Director of Harvard Institute for International Development and Professor of International Trade at Harvard University.

**Yohei Sasakawa** - See page 18.

**Martin Jan Stránský** - Neurologist and founder and publisher of the "New Presence" journal and several other periodicals, member of the Forum 2000 Programme Committee.

**Miklós Sükösd** - See page 25.

**Osvaldo Sunkel** - See page 25.

**Gavan Titley** - Students' Forum 2000 delegate from Ireland. Ph.D. student at Dublin City University. Working for the Center for Intercultural Studies.

**Antje Vollmer** - German theologian, Vice-President of the German Bundestag since 1994.

**Elie Wiesel** - See page 20.

**Marion Wiesel** - Editor, translator. A co-founder of the Elie Wiesel Foundation for Humanity. She has translated many of her husband's books from French to English.

**Flora Lewis** - Senior Columnist of The Times.

**Ondr  j Li  ka** - Students' Forum 2000 delegate from the Czech Republic. Student at the Faculty of Social Studies in Brno. President of Youth for Intercultural Understanding.

**Adam Michnik** - See page 23.

**Ji  r   Musil** - See page 24.

**Shinichi Nakazawa** - Professor of Religions and Anthropology at Chuo University in Japan.

**Ashis Nandy** - See page 24.

**Ji  r   Pehe** - Director of the New York University in Prague. Between 1997–1999 he headed the Political department of the Czech President's Office.

**William Pfaff** - Regular columnist for the International Herald Tribune, resident in France. He has written several books concerning political change and nationalism.

**Martin C. Putna** - Associate professor of comparative literature at Charles University in Prague. He specialises in the relationship between religion and culture.

**Zafir T. Qasrawi** - Students' Forum 2000 delegate from Palestine. Student of sociology, Director of the Palestinian Youth Council working on local and national level.

**Christina Rousheri** - Students' Forum 2000 delegate from Greece. MA in Southeast European Studies (Central European University). Working for Greek

**Kakuhan Enami** - Representative of His Holiness the Patriarch of the Tendai Buddhist denomination. Honorary Abbot of the Enryaku-ji monastery on Mt. Hiei.

**Albert Friedlander** - See page 21.

**André Glucksman** - French philosopher and writer.

**H.R.H. El Hassan Bin Talal** - See page 15.

**Hazel Henderson** - See page 15.

**Takeaki Hori** - See page 15.

**Victoria Pereyra Iraola** - Students' Forum 2000 delegate from Argentina. Student of Economics at Universidad de San Andrés in Buenos Aires. Working for La Fundación Gobierno y Sociedad.

**Josef Jařab** - Acts as a professor of English and American literature at Univerzita Palackého in Olomouc, where he was rector in 1989-1997. During 1997-1999 he was a rector of the Central European University in Budapest. In 1996-1998 he was a senator and member of the parliament assembly of the Council of Europe.

**Han Sung-Joo** - Former Minister of Foreign Affairs of the Republic of Korea. Now he serves as Professor of Political Science and the Director of the Ilmin International Institute at Korea University.

**Serguey Kovalyov** - See page 16.

**Petr Lebeda** - See page 23.

III 1999.10.10–10.13

**Timothy Garton Ash** - See page 13.

**Hanan Ashrawi** - In 1994, she founded the Independent Palestinian Citizen's Right Commission. Until 1998 she was former minister of Higher Education of Palestine. Now she is a member of Palestinian Legislative Council.

**H.H. Bartholomew** - Head of the Greek Orthodox Church, appointed the Metropolitan of Chalcedon in 1990, elected the Archbishop of Constantinople and the Ecumenical Patriarch in October 1991.

**Thomas Bata** - See page 20.

**Lydia Bosire** - Students' Forum 2000 delegate from Kenya. Student of Government and Economics specializing in international relations at Cornell University (USA). Board member of the World Voices.

**Fritjof Capra** - See page 13.

**Clement C. P. Chang** - President of the World League for Freedom and Democracy, founder of Tamkang University in Taiwan.

**Frederik Willem De Klerk** - See page 14.

**Ditta Dolejšiová** - Students' Forum 2000 delegate from Slovakia. Student in International Relations at the University of Economics in Prague. Member of the International Committee of the Circle of Youth and Children Association.

**Riane Eisler** - Cultural historian and systems and evolutionary theorist. Best known for her ground-breaking book "The Chalice and the Blade," which brings a new perspectives to the past, present, and future.

Council of Europe Author of about 30 specialised publications.

**Miklós Sükösd** - Hungarian sociologist engaged at the Central European University.

**Osvaldo Sunkel** - Distinguished Chilean economist devoted to economics of development, international relations, economic history, and the environmental consequences of economic development. Lectured at universities in Latin America, the United States, and Europe.

**Weiming Tu** - Historian, philosopher, and writer of Chinese origin. Lectured at various universities in the USA, Hong Kong, Paris, China. Author of many books on the Chinese history and philosophy.

**Reizo Utagawa** - Japanese economist and journalist, managing director of the Nippon Foundation.

**Silje Marie Berntsen Vallestad** - Students' Forum 2000 delegate from Norway; currently studying Religions at the University of Bergen; Founder of the international youth organisation "World Voices."

**Magda Vásáryová** - See page 19.

**Lord Arthur George Weidenfeld** - Journalist and publisher. Founder and director of the Weidenfeld and Nicolson publishing house. Worked with the BBC as an international commentator for Europe and North America. He was the advisor and the Head of the office of the Israeli president Weizmann.

**Tun Daim Zainuddin** - Leading Malaysian economist, Minister with special Functions focused primarily at leading the country out of the current crisis, former economic advisor to the Malaysian government.

**Jiří Musil** - Sociologist, founder of the Czech sociology of town and housing. Former advisor to the Housing Committee at the United Nations Economic Commission for Europe. Lectured at international universities.

**Ashis Nandy** - Director of the Centre for the Study of Developing Societies. Multi-faceted thinker and author of many books on post-colonialism, alternative sciences, psychology and others.

**Yael Ohana** - Students' Forum 2000 delegate from Ireland. Graduate of Political Science at the Central European University. Consultant on youth issues at the European level, primarily concerned with issues of citizenship, participation, and young people from minorities.

**Divyya S. Rajagopalan** - Students' Forum 2000 delegate from India; currently studying law at the Anglo - American College in Prague, and English and European Union law with Cambridge University in England.

**Jacques Rupnik** - See page 18.

**Yohei Sasakawa** - See page 18.

**Karan Singh** - Major Indian politician, former Minister and Ambassador; devoted to civic causes, social reform and religious tolerance; currently lectures in the field of Indian philosophy.

**Mohammed Amine Smaili** - Professor of Islamic Dogmatic and Compared Religions at the University of Rabat. Expert in islamic-christian dialogue. Religious advisor to the King of Morocco.

**Hanna Suchocka** - Minister of Justice and Attorney General of the Polish Republic, Prime Minister of a central-right government between 1992–1993. Chair of the Parliamentary Delegation for the Parliamentary Assembly of the

to several American presidents and State Secretaries between 1973 and 1977. In 1973 awarded the Nobel Prize for Peace.

**Leszek Kolakowski** - Leading world philosopher of Polish origin. Lectured at several universities. Resident in Oxford lecturing at the All Saints College.

**Serguey Kovalyov** - See page 16.

**Krishan Kumar** - Internationally recognised professor of social political science, lecturing in Central Europe, Great Britain and the US. Published a range of books on modern society, e.g. "The Rise of Modern Society" and "From Post-Industrial to Post-Modern Society."

**Hans Küng** - President of the foundation for global ethics and former director of the Ecumenical Research Institute at Tübingen university. Author of many major publications.

**Meir Lau** - Chief rabbi of the Israeli Ashkenazi community in Israel, of Polish origin. The first rabbi since the establishing of State of Israel to meet the Pope and invite him to Jerusalem in 1993.

**Petr Lebeda** - Students' Forum 2000 delegate from the Czech Republic, graduate of International Relations. Student of Political Science at Prague University of Economics.

**Adam Michnik** - Prominent Polish essayist, historian, intellectual and former dissident under communist rule. He is Editor-in-Chief of one of Europe's most respected dailies, Gazeta Wyborcza. Life-long activist for human rights.

**Bedřich Moldan** - Former Minister of the Environment of CSFR, director of the Environmental Issues Centre at the Charles University and deputy chairman of the UN committee bureau for sustainable development.

**Ivan Gabal** - Renown Czech sociologist, former head of the political analysis department of the CSFR Presidential Office, member of the Czech Helsinki Committee.

**Tomáš Halík** - President of the Czech Christian Academy, professor at Charles University. Catholic priest, former advisor to the Pontifical Council for dialogue with non-believers. He is concerned with the philosophy and sociology of religion and with inter-religious dialogue.

**Václav Havel** - See page 15.

**Hazel Henderson** - See page 15.

**Mae-Wan Ho** - Professor of biology at the British Open University. Author of many publications, among others “Genetic Engineering: Dream or nightmares?”

**Marek Jacina** - Students’ Forum 2000 delegate from Canada; Recent graduate of German and French Studies at the University of Calgary; Member of the Political Department of the Office of the President of the Czech Republic.

**Wei Jingsheng** - Major dissident, father of the Chinese movement for modern pro-western democracy. Spent long years in prison. Awarded the Olof Palme Prize (1995) and the Andrej Sacharov Prize (1996). In 1996 nominated for the Nobel Prize for Peace.

**Jonas Jonson** - Bishop of Strängnäs, Church of Sweden. Member of the World Council of Churches Central Committee.

**Koei Kani** - Representative of the Japanese Tendai Buddhist school.

**Henry A. Kissinger** - American politician, diplomat and political scientist. Aid

**Kurt Biedenkopf** - Prime Minister of Saxony.

**Jean-Louis Bourlanges** - Member of European Parliament, Chairman of the European Movement in France.

**Hans Van Den Broek** - Member of the European Commission.

**Martin Bútora** - Sociologist and writer, president of the Institute for Public Affairs in Bratislava. From 1990 to 1992, he was the advisor to President Havel for human rights.

**Hillary Clinton** - First lady of the USA. In the 80's, she became a recognised lawyer specialising in commercial law. In 1989 the National Law Journal ranked her among the one hundred most influential lawyers in the US.

**H.E. Fawzy Fadel El Zefzaf** - Deputy of Al Azhar and President of Al Azhar Permanent Committee of Dialogue among Heavenly Religions.

**Amitai Etzioni** - Leading German-born American sociologist and social psychologist, classic of economical sociology. He has been awarded an honorary doctor's degree at various American universities. Author of many publications.

**Gareth Evans** - See page 14.

**Joerg Forbrig** - Students' Forum 2000 delegate from Germany; political scientist, researcher at the European University Institute in Florence, Italy.

**Albert Friedlander** - The first overseas-born rabbi to be awarded the Order of the British Empire. Rabbi Friedlander was ordained in 1952. He is Dean of the London Rabbinical Seminary Leo Baeck College, Vice President of the World Union of Progressive Judaism, Associate President of the Conference of Christians and Jews, and Emeritus Rabbi of the Westminster Synagogue in London.

**Elie Wiesel** - Recipient of the Nobel Prize for Peace in 1986. An Andrew W. Mellon Professor in the Humanities at Boston University. The author of more than thirty books. In 1987, together with his wife Marion, he established The Elie Wiesel Foundation for Humanity. One of the founders of the Forum 2000 project.

**Masakazu Yamazaki** - Playwright, critic and Professor at the Graduate School of Integrated Science and Art, University of East Asia. Recipient of the Kishida Kunio Drama Prize and the Yomiuri Literary Prize. His writings include “Mask and Sword” and “On the Art of Noh.”

**Zhelyu Zhelev** - President of Bulgaria until early this year, former dissident and independent thinker. Leading representative of democratic forces in Bulgaria.

## II 1998.10.11 – 10.14

**Shariff M. Abdullah** - Director of the Commonway Institute in the USA. He is concerned with the negative impact of globalization on the developing world.

**Mehmet Aydin** - Dean of the Faculty of Theology at the University of Dokuy Eylul in Izmir (Turkey), Professor of philosophy.

**Thomas Bata** - Famous Czech-born businessman resident in Canada. He is the president of Bata limited, presides over the BIAC at OECD, and he is the Canadian director of the International Trade Council. He acted as the expert advisor to the UN Commission on suprational corporations and a member of IBM Canada Ltd. and Canadian Pacific Airlines boards of directors.

**Robert L. Bernstein** - President of the Human Rights Watch, he is also engaged in the Robert Kennedy and Aaron Diamon foundations.

and a proponent for the abolishment of the death penalty in the USA.

**René-Samuel Sirat** - Grand Rabbi of French Consistory and President of the Council Conference of European Rabbis. Important Judaic theologian who is active in inter-religious dialogue and in the Israel-Arab conflict reconciliation.

**Sulak Sivaraksa** - Important Buddhist thinker. Author of “Seeds of Peace: a Buddhist Vision for Renewing Society.”

**Wole Soyinka** - In 1986, he was the first African to receive the Nobel Prize for Literature for his existentialism oriented work; he has devoted his entire life to the struggle for Human Rights and democracy in Nigeria; currently resides in the USA.

**Magda Vásáryová** - Former Ambassador of the CSFR to Vienna and Founder and Chairperson of the Slovak Foreign Policy Association.

**Abdurrahman Wahid** - Influential Indonesian intellectual. An open supporter of democratic reforms he leads Nahdlatul Ulama, the largest Moslem organization in the country, as well as Forum for Democracy.

**Immanuel Wallerstein** - Current President of the International Sociological Association. He formulated the world theory system in his book “The Modern World System.”

**Richard Von Weizsäcker** - German President between 1984 and 1994. As a symbol of German reunification, he also encouraged Germany to reflect on World War II war crimes.

**Cornel West** - Afro-American writer and Professor in Afro-American studies at Harvard University. A respected authority in the field of racial and social equality.

Movement. Recipient of the 1996 Nobel Prize for Peace, in recognition of his work towards a just and peaceful solution to the conflict in East Timor.

**Jacques Rupnik** - Political Scientist, based in Paris, who focuses on Central European events. Author of “The Other Europe” about the Communist bloc and many other publications. Presently the Director of Studies at the Centre for International Affairs, Fondation des Sciences Politiques in Paris.

**Yohei Sasakawa** - Renown philanthropist and President of the Nippon Foundation. His foundation is heavily engaged in programs of medical assistance in the wake of the Chernobyl disaster, Leprosy Control Project, Sasakawa Global 2000 agricultural programs in Africa and many other projects throughout the world. WHO’s Special Ambassador for the Elimination of Leprosy. He has worked for leprosy elimination for nearly 30 years.

**Seizaburo Sato** - Professor Emeritus at the University of Tokyo. Research Director of the Institute for International Policy Studies. Published many books and numerous articles on Japanese politics and foreign politics.

**Helmut Schmidt** - German Chancellor between 1974 and 1982. Completed Brandt’s doctrine of opening of a dialogue and the signing of agreements with the nations of Eastern Europe.

**Leila Shahid** - Former journalist. Representative of Palestinian authority in France.

**Haris Silajdžić** - Co-prime minister of Bosnia and Herzegovina. A Bosnian Muslim, he alternates the post with a Bosnian Serb. He also heads the Party for Bosnia and Herzegovina, which struggles for the co-existence of all people in that country.

**John Silber** - Chancellor of Boston University. Author of “Straight Shooting”

**Khotso Makhulu** - Archbishop of Central Africa. He has a deep concern for some of the major issues that face developing countries, such as the international debt.

**Michael Mann** - Historian, who deals with long term development of the European society and the problems of nation states. Author of well known “The Sources of Social Power.”

**Hans-Heinrich Nolte** - Professor of Eastern European history at the University in Hannover since 1978. Author of a number of works which deal with questions of peripheries and with the formation of one world.

**Michael Novak** - Theologian and Political Scientist. He is the recipient of the Templeton Prize in 1994. Author of a number of works about the relationship of liberal society (esp. capitalism) and Christianity, for example: “The Spirit of Democratic Capitalism.”

**Raimon Panikkar** - Professor Emeritus at the University of California. Ordained as a priest of the Roman Catholic Church in 1946 and author of several books, for example “The Silence of God.”

**Shimon Peres** - Leading Israeli politician. As Minister of Foreign Affairs, together with Yitzhak Rabin, made a lasting contribution to the peace process in the Middle East, for which he received the Nobel Peace Prize in 1995.

**John Polanyi** - Professor of Chemistry at Toronto University. Deals also with the nature of scientists' responsibility and democratic values that are attached to science.

**José Rámos Horta** - Minister of Foreign Affairs of the East Timor Transitional Cabinet. From the Indonesian invasion in 1975 for over a decade Permanent Representative to the United Nations of the East Timor's Independence

**Ted Koppel** - Anchor and Managing Editor of ABC News's "Nightline" since it began in 1980. He has spent thirty-one years with ABC News as an anchor, foreign and domestic correspondent, and bureau chief. Co-author with Marvin Kalb of best-selling book "In the National Interest."

**Serguey Kovalyov** - Deputy of Russia's State Duma. Well known human rights activist and opponent of Russia's war in Chechnya. Chairman of the Committee for Human Rights he was also imprisoned in 1974 for what were called "anti-Soviet activities," and spent ten years either in jail or in exile.

**Jack Lang** - Member of the European Parliament. Former French Minister of Culture, Minister of State and Minister of National Education. A Professor of Law at Paris X University-Nanterre.

**Joshua Lederberg** - Recipient of the Nobel Prize for Medicine in 1958. Well-known Geneticist and member of the U.S. National Academy of Sciences. Recipient of the U.S. National Medal of Science.

**Marguerite S. Lederberg** - Professor of Psychiatry at Cornell University. She is a member of several medical societies and widely-published in specialized journals.

**Nikolaus Lobkowicz** - Philosopher, former rector of Munich University and former President of the Catholic University of Eichstätt in Germany, where, in 1994, he founded the Institute of Central and East European Studies.

**James Lovelock** - Author of the "Gaia" theory, as well as approximately 200 scientific papers. His main interest is the Life Sciences.

**Jean-Marie Cardinal Lustiger** - Archbishop of Paris and member of the French Academy.

“Thirteen Ways of Looking at a Black Man.”

**Bronislaw Geremek** - Historian and member of the Polish Parliament. Former advisor to Solidarity and Lech Walesa.

**H.R.H. El Hassan Bin Talal** - Crown Prince of the Jordan Hashemite Royal Dynasty. Writer, philosopher and economist who presses for tolerant co-existence of Islam, Judaism and Christianity as well as democratic processes in the traditional Islamic world. He also plays a prominent role in the Middle East peace process.

**Václav Havel** - President of The Czech Republic. A playwright and political activist, he was incarcerated several times for his beliefs and influential essays. One of the leaders of the Civic Forum opposition movement which helped bring about the overthrow of communist rule in Czechoslovakia.

**Hazel Henderson** - Futurist and author of the well-known “Building a Win-Win World.” Her articles appear in newspapers around the world and she is also a board member of the Worldwatch Institute.

**Thor Heyerdahl** - Well-known ocean traveller, environmentalist and founder of the Kon-tiki Museum in Oslo.

**Takeaki Hori** - Writer and Economic Anthropologist.

**Vyacheslav Ivanov** - Professor at the University of California at Los Angeles. He studies the problems linked to the ethnic and linguistic conflicts, and to the disappearance of the languages of native peoples.

**Claude Jasmin** - Professor of Oncology and founding President of the International Council for Global Health Progress. Recipient of several awards for AIDS and cancer research.

**Cornelius Castoriadis** - Director of “Ecole des Hautes Etudes en Science Sociales.” Author of more than 15 books, including “Philosophy, Politics, Autonomy.”

**Joseph Chan** - Professor at The University of Hong Kong. His recent writings focus on Confucianism, human rights and liberalism.

**Tze-Chi Chao** - Leading intellectual and President of World League for Freedom and Democracy.

**Lord Ralf Gustav Dahrendorf** - Liberal Political Scientist and Sociologist. Author of many theoretical works and publications about the transformation of society including “Reflections on the Revolution in Europe.”

**H.H. The Dalai Lama** - Highest Spiritual Representative of Tibet. He was appointed as Dalai Lama XIV, ruler with all political rights, in 1954. He has lived in exile in India since 1956. For his peaceful struggle for freedom and basic rights of the Tibetan people, he received the Nobel Peace Prize in 1989.

**Frederik Willem De Klerk** - Former President of South Africa. Together with Nelson Mandela he made a decisive contribution toward the removal of Apartheid from political life in South Africa, and established a process of reconciliation between the black majority and the white minority. Together with Nelson Mandela he received the Nobel Peace Prize in 1993.

**Gareth Evans** - Former Minister of Foreign Affairs of Australia. Best known for his role in developing the UN Peace Plan for Cambodia and for founding the Asia Pacific Economic Cooperation (APEC) Forum.

**Henry Louis Gates** - W.E.B. Du Bois Professor of the Humanities at Harvard University, as well as the Director of Harvard’s W.E.B. Du Bois Institute for Afro-American Research. Also the author of many books, the latest being

## Conference Participants (1997–2001)

---

I 1997.9.3–9.7

**Oscar Arias Sanchez** - Former President of Costa Rica. Recipient of the Nobel Prize for Peace in 1987 for his efforts to draft the peace plan between Nicaragua, Guatemala, Honduras and El Salvador. One of the best-known peace activists in the region he established the Arias Foundation for Peace and Human Progress.

**Timothy Garton Ash** - Political scientist and writer. Author of many books about revolutions in Eastern Europe and a regular contributor to “The New York Review of Books” and “The Times.”

**Patricio Aylwin Azocar** - President of Chile between 1990 and 1995. During the Presidential elections he defeated General Pinochet and contributed to the return of democracy in Chile. Currently, he is the honorary President of the World Democratic Congress.

**Carlos Felipe Ximenes Belo** - Recipient of the 1996 Nobel Prize for Peace, in acknowledgment of his work towards a just and peaceful solution to the conflict in East Timor.

**Ignatz Bubis** - Well-regarded thinker and moral and political authority. Representative of Jewish associations and the Chairman of The Central Council of Jewish Organizations in Germany.

**Fritjof Capra** - Physicist and System Theorist. Director of the Berkeley-based Center for Ecoliteracy and author of several books, he has been engaged in a systematic examination of the philosophical and social implication of contemporary science in society.

us are strongly influenced by our experience and our particular vantage point. Through mutual discourse we must constantly seek and test the concepts, strategies and approaches that stand the best chance of becoming universal values and generally acceptable rules. Without a culture of global dialogue all attempts at cultivating a global society will come to naught.

## **6. AN APPEAL TO THE WORLD PUBLIC**

The Prague Declaration covers a complex range of global issues and addresses a wide array of institutions and decision-makers. It is they who bear the greatest responsibility. However, the Forum 2000 conferences have been characterized by the informal and personal character of the debates. In that spirit of openness and trust we would therefore like to offer the Prague Declaration to all people of goodwill on our planet. Only when all human beings start to realize more fully their shared responsibility for our shared world can our belief be justified that what is hopeful in today's world will one day prevail over what threatens us.

*Article 14*

### **The Broadest Possible Representation**

Inadequate opportunity to participate in such a dialogue and be regarded as an equal partner breeds frustration, a sense of injustice and distrust. When voices are ignored they find undesirable ways of drawing attention!

However, it is not in the power of any conference, not even Forum 2000, to make room for every voice that is raised around in the world. Nonetheless it is necessary to go on looking for ways to open the debating chamber to the voices of those who have so far been disadvantaged or discriminated against in some way and thus marginalized in the global dialogue.

*Article 15*

### **Plurality of Opinions**

To strive for uniformity of views is not only misleading, but also breeds false cognitive—and hence moral and institutional - dominance. Representatives of different views—of more critical, non-conforming and disquieting attitudes—are essential for discovering global alternatives, for faithfully representing the global reality and building a credible global dialogue. Slow, complicated, costly and painful as such debates are bound to be, they establish a globally indispensable, long-term process of mutual learning, foster a culture of respect, promote a culture of respect and an atmosphere of fairness.

*Article 16*

### **Helping to Build a Global Society**

Genuine dialogue is impossible in a situation in which one of the participants dominates the rest. It requires both honesty and caution. Global alternatives and viable solutions cannot be discovered unless invalid assumptions are questioned, false logic is challenged, particular interests are identified, and oversimplifications and improper generalizations resisted. The attitudes of all of

## **5. HOW TO CONDUCT A DIALOGUE**

The enormous relevance of critical discussion of global problems has been acknowledged throughout the five-year conference series. The Forum 2000 conferences constitute a distinct experiment in terms of their scope, their informal atmosphere and the range of participants. Not only have they been an exercise in analyzing global problems, but equally—and perhaps more importantly—they have been an exercise in conducting a global dialogue on complex issues among people of many different views. This experience of creating a culture of sensitive but non-trivial global dialogue is an important part of the Forum 2000 message. The following principles should underlie the creation of a culture of meaningful and sustainable global discourse:

*Article 13*

### **The Culture of Dialogue**

The way discussions are conducted is as important as the topics addressed in the debates. Unless others are accorded a respectful hearing, unless the legitimacy of people's otherness, cultural differences and the variety of political forms is sincerely acknowledged, no global debate can have any meaning or achieve results. In the case of many complex topics or when there are major cultural differences or differences of opinion, establishing a culture of dialogue may be the only positive achievement for some time. However, we firmly believe that the experience of dialogue can be a solution and the path towards creating a culture of relationships, a kind of global civilization that would turn out planet into a safe and decent home for all its inhabitants.

should not be reduced, but rather transformed to reflect common global values. States should create a legal environment for non-governmental organizations and private companies agencies to act as freely as possible and devote maximum resources to supporting education as basic conditions for a future of human dignity, as well as maintaining infrastructure and communication, and guaranteeing security and international cooperation. Regulation and enforcement should still be the state's ultimate responsibility.

*Article 10*

**Basic Education for All**

The United Nations, together with other international organizations and member states, should realize a worldwide program to guarantee free basic education to all children of the world as one of the main conditions for overcoming ignorance, want, and the terrorism that feeds on them.

*Article 11*

**Responsible Independent Media**

A particular responsibility is born by the mass media to ensure that they do not perpetuate and disseminate false information, stereotypes about other religions or ethnic groups, or a fascination with violence. This applies especially to media reporting in one cultural or religious community about another.

*Article 12*

**Global Civil Society**

Civil society has a key role in the transformation of global values into effective instruments. A vibrant, independent civil society should operate at local, national and global level. It plays an indispensable role in creating the vital fabric of relationships between morality, politics and economics, between markets and states, between the global and the local, i.e. at all levels and between them.

conferences have demonstrated that representatives of religions and churches are capable of seeking what unites them and valuing it more highly than what divides them. Religions hold great potential for the future of mankind; they can play an important role in reconciling different cultures, promoting a universal ethic and working together to create a moral climate in a globalized world. However under certain circumstances and in particular forms, religious ideals and symbols can be misused into order to escalate conflicts between minorities and larger groups and communities. We therefore appeal to believers of various religions and their leaders to support all activities aimed at promoting dialogue, mutual understanding and cooperation among people and breaking down the barriers between individual religions and spiritual currents, and to distance themselves from all expressions of intolerance and violence.

*Article 8*

**Transnational Corporations**

Global trade accounts for an ever-growing proportion of material wealth and the transnational corporations are primary carriers of growth, innovation and creativity. In many areas there is no one else to provide people with needed jobs, capital and technology. Economic globalization gives huge power and influence to multinational companies. However, their operations under global principles often disregard the local context, harm the environment and directly or indirectly violate human rights. If companies are to become responsible global actors, values—in the form of moral codices, social and environmental audits etc.—should play a greater role in their behavior.

*Article 9*

**Education and the Role of the Nation State**

Despite the continuing process of international political integration, nation states are major actors in international affairs. Most states today have democratically elected governments. The role of the state in the era of globalization

*Article 5*

## **International Law**

Although many global agreements have been signed and ratified, only a few of them have been implemented. International law needs to be reformed in order to overcome its volatile, inconsistent and non-binding nature and introduce effective, transparent and equitable mechanisms of enforcement. Just as certain limitations on individual freedoms and privacy help ensure greater security, so also there must be limitations on national sovereignty if international law is to be effective. Only then can global values prevail over particular interests and short-term considerations.

*Article 6*

## **Bretton Woods Institutions**

The International Monetary Fund, the World Bank and the World Trade Organization are often the object of criticism, rejection and dramatic protests. These institutions have major potential to promote development where it is most needed and to cooperate in the creation of global economic, legal and ethical norms and their implementation. However in order to realize this potential they need to become more open, transparent, representative and more responsible in the wider context of their activities, in line with the great power and influence they wield. We therefore appeal to governments to exercise pressure on those institutions along these lines and also call for a more objective attitude on the part of the media, a more constructive and above all non-violent approach on the part of critics and demonstrators and greater commitment and creative thinking on the part of diplomats and economists.

*Article 7*

## **World Religions and Churches**

The multireligious assemblies that have been an important part of Forum 2000

transcending our lives. As individuals, communities and societies, we should respect it and act accordingly as responsible custodians, overcoming the temptations of individual or group selfishness. Respect for humanity, for every human being, and for human life at every stage of development, as well as responsibility for the environment, are key preconditions for the sustainability, continuity and humanity of global civilization.

#### **4. WHAT TO CHANGE**

The values set out above are in no way new to humankind. Indeed, many of them are already referred to—albeit inadequately—in important multilateral conventions, various solemn documents and international legislation. However, many of them are not matched by adequate and functioning institutions. It has been the ongoing effort of Forum 2000 to define a global institutional framework that would allow these values to be translated readily into practical instruments, to overcome any possible internal conflicts and to set global priorities.

*Article 4*

**United Nations**

The largest and most representative of all global institutions is still lagging behind global realities. Voting in the Security Council still tends to reflect the distribution of power in the mid 20th century rather than the present need for effective global dialogue, universal participation, empowerment and a new ethos. Reform of the UN should be also aimed at creating a UN body to deal on a permanent basis with the environmental crisis. In the new century the UN should be more flexible and effective and able to take more rapid and appropriate action. This is the only way to enhance its authority.

political conditions. Greater efforts should be made to nurture the real sources of values, the spiritual foundations of civilization, and to seek and assert a common ethical codex and a global concept of human rights, and on this basis create and cultivate political institutions aimed at regulating economic and technological globalization.

*Article 1*

**Solidarity, Equality and Inclusion**

In view of the present unequal distribution of resources and economic benefits there needs to be a global system of solidarity to protect the basic rights of all those who cannot fully participate, let alone compete, in international competition. The right to minimum and equal human treatment and the right of people to participate in matters having an impact on themselves should be cornerstones of global civilization in the 21st Century. This applies particularly to the position of women also, not least, those facing abuse in their own families and homes, which was movingly described in the course of our meetings.

*Article 2*

**Tolerance, Understanding and Protection of Difference**

The diversity of global civilization is one of its greatest assets—a pool of experience, knowledge and alternatives. Protecting different forms of governance and cultural expression as well as different religious faiths and lifestyles especially those that are small, weak or in the minority—is therefore an imperative for global society. The right to be different should apply everywhere as long as it does not open the way to intolerance or violation of other human rights.

*Article 3*

**Respect and Responsibility**

All life on the planet, including human existence, is grounded in a higher order

## **The Political Effectiveness of the Global Economy**

Global capitalism is the source of both growing wealth and growing tensions in the world. It would be impossible to maintain the legitimacy of global markets were they to benefit only one fifth of the global population while exploiting the natural and human resources of the remaining four fifths. Unregulated competition and capital mobility eventually cause harm to individuals and societies. In this they represent the other extreme from totalitarian and command economies. Major challenges to the global economy—such as stimulating efficiency and development while protecting the losers and the environment—are not solely an economic problem, but have to be addressed by social and political institutions as well. Effective policies must be matched by political foresight and moral responsibility.

## **Local Identity, Social Capital and Human Development**

The ideal global economy is not one that is strictly regulated, but one that strengthens and enhances positive forms of local identities, increases social capital and develops human capacities and opportunities. The global economy must never be allowed to elude human control and for this reason its destructive effects must be offset by sustainable local development. The challenge lies in finding a balance between capital investments and investments in education, between comparative advantage and support for civil society, and between the role of state and the development of private activity.

## **3. WHAT TO NURTURE**

Throughout the Forum 2000 series, the participants were involved in a search for values common to all world religions, cultures and communities, values that could become the core of global ethical codex, a common spiritual ground for humanity. It is unacceptable that the form of individual national societies should be determined by uncontrolled economic development and particular

## **Ethical Minimum**

The sheer extent and variety of violence that occurred in the 20th Century is something to be borne constantly in mind in the 21st Century. It would be useful to assert a global ethical minimum reflecting humanity's fundamental moral principles that must be respected. It would comprise the injunction to treat every human being humanely as well as the golden rule governing relations between individuals and between human communities: "Do unto others as you would have done unto you; refrain from doing to others what you would not like them to do to you." Heightened ethical consciousness should help alleviate enormous human suffering, halt the degradation of the natural environment and limit the dramatic extinction of species and cultures. Global resources are allocated very unequally and inadequately. Therefore perhaps the greatest global challenges of all today is how to divert resources from arms and the drugs trade, and from excessive luxury and material consumption into efforts to combat hunger and disease, prevent violent conflict and solve problems associated with global warming and natural disasters.

## **Global Democracy**

The richness of life on Earth is demonstrated, *inter alia*, by the myriad ways in which human affairs are administered. It is crucial to protect the plurality of forms of governance and political participation. However, certain universal standards—perhaps best expressed in the concept of human rights—must be asserted unequivocally and the widest international support must be won for them. No human society or government is perfect but a clear criterion must be clearly enunciated in order to differentiate between democratic institutions, good governance and open societies on the one hand, and those forms of government that violate human dignity, discriminate against minorities and do not respect the rule of law, on the other. The challenge of global democracy is one of finding instruments and institutions that will equally protect globally shared values and local differences.

## **The Prague Approach**

Every autumn for the past five years people have gathered at Prague Castle united, in spite of their many differences, by a common desire to seek and find answers to these questions. They have included distinguished world figures—Nobel laureates, prominent politicians, influential intellectuals and academics, artists and writers, as well as representatives of different world religions and spiritual currents. The Forum 2000 conferences have sought to explore less obvious, more controversial and profounder aspects of global development. Along the way, we believe, a unique and relevant approach to globalization has emerged in Prague, characterized in particular by a focus on spiritual, cultural and religious values. The Prague approach broadly reflects the critical spirit and intellectual tradition of this city located at the crossroads of European history, a city which emitted reforming ideas and spiritual impulses.

The series of Forum 2000 conferences has come full cycle. Its participants would like to share their conclusions with international decision-makers and those who have greatest influence on public opinion and therefore turn with particular urgency to politicians and religious leaders. But we address ourselves also to scientists and business people, creative artists and people in the media, and above all to young people everywhere. We appeal to all people who are not indifferent to the fate of the world to give responsible thought to the problems we seek to outline in this Prague Declaration.

## **2. PRINCIPAL CHALLENGES**

The Forum 2000 Conferences held in the years 1997–2001 highlighted a number of serious problems facing the world on the threshold of the new millennium. Most of them were related to at least one of several aspects of globalization and sought to indicate the direction that reforms might take:

# The Prague Declaration

*Approved by the Fifth Forum 2000 Conference  
Prague, Czech Republic,  
17 October 2001*

## 1. INTRODUCTION

Globalization, as both a process and an already existing condition of the world, typifies the development of civilization at the beginning of the Third Millennium. Its powerful and omnipresent dynamic has undoubtedly been responsible for many achievements of benefit to humanity but it is also viewed by many as a threat in almost every area of human endeavor. The promise of universal well-being and prosperity, which lies at the heart of the modern age, has turned out to be an illusion. The vast majority of the world's population suffer from profound economic inequality, and are psychologically and culturally marginalized in the global society now coming into being, and in some cases are also marginalized in the societies of their own countries. In spite of the unprecedented flourishing of political institutions they lose control over their own destinies. The billions of dollars traded daily, the wide availability of health care and three decades of heightened concern about the ecological aspects of development have not protected the majority of humanity from the growth of every kind of hardship, including poverty, disease, and environmental degradation. The more dominant is the economic and technological globalization of humankind, the harder it is to control it by democratic political means. This is alarming. So far humanity lacks the courage and the will to choose the path of cooperation. The social basis and moral justification of globalization are increasingly called in question, on the grounds that apart from its positive aspects it threatens to unify culture and rob the world of its complexity and variety, as well as to heighten inter-cultural confrontation and impede mutual understanding. Equally imperiled are peaceful co-existence among nations and the very survival of humankind.



## 著者紹介

---

### 堀 武昭（ほり・たけあき）

1940年横浜生まれ。慶應義塾大学、シドニー大学に学ぶ。専攻は経済人類学、国際関係論。米日財団副理事長、豪日交流基金アドバイザー等を経て、現在フォーラム2000財団理事、カレル大学客員教授。『オーストラリアの日々』『マグロと日本人』（以上、NHKブックス）『反面教師アメリカ』『東欧の解体、中欧の再生』『サシミ文化が世界を動かす』（以上、新潮選書）等、著書多数。

## **21世紀の人類に対して今我々ができること プラハにおける世界の著名人との対話をもとに**

---

発行日 2002年10月1日

---

著者 堀 武昭

---

発行所 笹川平和財団  
〒107-8523 東京都港区赤坂1-2-2 日本財団ビル4階  
電話 03-6229-5440 ファックス 03-6229-5473  
URL <http://www.spf.org>

---

印刷・製本およびサービスのお問い合わせ

コンテンツワークス株式会社 BookParkサービス  
〒112-0014 東京都文京区関口1-24-8東宝江戸川橋ビル3F  
電話 (0120) 298-956  
URL <http://www.bookpark.ne.jp>  
E-Mail support@bookpark.ne.jp

---

